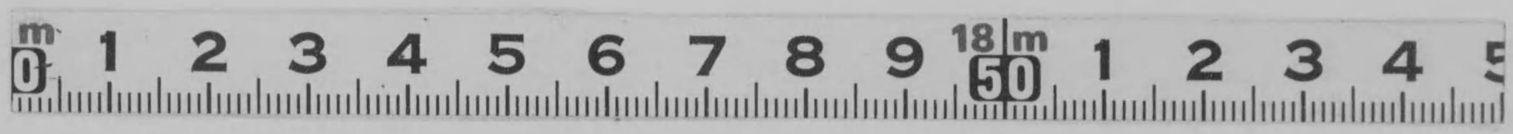
投口



388
208

388-208

三浦製絲場主

久米正雄作

大正
9.9.10
内交

ma 1524 6.20

三浦製絲場主……一
第一幕……五
第二幕……四一
第三幕……七〇
第四幕……一〇八
飜弄……一二九

三浦製絲場主

（社會劇四幕）

久米正雄

人物

三浦淳吉。製絲場主。三十歳。
同　淳藏。その父。五十七歳。
同　ふさ。その母。五十一歳。
同　とし。その從妹。二十歳。
關口ひで。女工、後に淳吉妻。二十一歳。
國分寅治。職工長。三十三歳。
太田俊三。醫師。三十一歳。
町田源吾
中村五郎
三瓶清治
岩田勇作　職工。三十歳前後。
安藤權平。老職工。權爺と呼ばる。七十歳位。

同　つな。その娘。寡婦。二十七歳。
田村さだ。看護婦。二十三四歳。
給仕。女中。及び職工女工貧民等の群。

時代

現代。事件の經過は約半ケ年に亘る。

場所

東北地方の一小都會。

第一幕

職工長國分寅治の家。

街外れの暗く小さい長屋の内部。左手には街道に面する入り口があつて、そこを入ると三尺ばかりの土間、その土間から更に一段高い疊敷へ上るやうになつてゐる。正面及び右手は、煤けたる壁又は障子にて適宜に劃られ、貧しき家具、厨具の類が室の隅隅に置いてある。而してそれらの不整頓によつて、此處が男の獨身居たる事が歴然と示されてゐる。右手の隅に床を敷いて、女工闘口ひでが病臥してゐる。彼女は製絲工場の機械に觸れて過つて片腕を傷けたが、不完全な療治と身體の衰弱のため、餘病を併發して苦しんでゐたのを、一時、寅治が引取つて介抱してゐるのである。

幕があいた時、寅治は遅い晝食を濟まして、片づけかけた食臺の上に肘をつき乍ら、呆然と物を考へてゐる。一と所にぢつと見据ゑられた彼の眼は、それ自身「反抗」であるかのやうな輝きを見せてゐるが、蒼く削げた兩頰は、ストライキの首領として闘し

て來た、此の數日間の心勞を物語つて餘りある。彼は身動きもしない。

暫くして近くを汽車の響が此沈默の中に傳はる。……

ひで。（ふと顏を上げて四邊を見廻す。亂してゐる病髮の間から、彼女の整つた顏の輪廓と、頼りなげなる眼が見える。さうして明瞭な聲音で呼びかける。）國分さん。

國分。（默想から我に歸つて）何だい。

ひで。一體わたしはどうなるんでせうねえ。

國分。又初めたね。いゝから心配はよしなよ。おまへの身の上に就てなら、ちつとも案じる事はありやしない。

ひで。だつて、いつ迄もかうして御厄介になつちやゐられませんわ。

國分。それあ俺だつて行末永くおまへの世話をする譯にも行くまいけれど、決して此儘おつぽり出すやうな事はしやしないよ。ちやんと會社の方から、おまへの怪我に對する正當な療治金と、たとひその片腕が無くなつても、末々一人で暮して行けるだけの、賠償

金は十分取つてやるから、それまで安心してゐるがいゝよ。

ひで。でももうあの時三十圓出して貰つたんですもの、社長さんの方ではもう出して呉れないでせう。

國分。おまへもよつぽど馬鹿だなあ。その三十圓ばかりの金が何になつたと云ふんだい。もう疾うの昔費ひ盡してゐるぢやないか。そしてその三十圓の療治金で、おまへの傷が もう癒つたとでも云ふのなら兎も角、まださうして益々惡くなる一方ぢやないか。一體全體三十圓ばかりの端た金で、折れた片腕がもとへ戻るものかどうか、鳥渡でも考へて見るがいゝんだ。

ひで。でも私の不注意で、器械に引かゝつたのですから。……

國分。さうおまへ一人であきらめて、默つて死んで了ひたいと云ふのなら、それもかまひはしないけれども、かう云ふ事はおまへ一人の問題ぢやないんだぜ。吾々職工全體、勞働者一般の問題なんだ。もし此儘おまへが泣寢入りにでもなつて見るがいゝ、それこそ會社側に取つちや、此上もなく都合のいゝ先例を殘す事になるんだ。さうして之から其

先例を楯に、どんな事を云ひ出すか解つたものぢやないんだ。片腕は愚か片足をもぎ取られても、三十や四十の端た金で、どん〳〵突つ離される事にでもなつたら、どうして俺たちが安心して、何千ボルトとかの電力で調べ革が行つたり來たりする中を、平氣で歩るいてゐられるものか。——それあおまへの怪我だつておまへの不注意には違ひないが、三十圓ばかりの包み金で其儘放つて置くなんて、どこの國のどんな工場にもありやしないよ。

ひで。でも私のために皆さんが、仕事を休んでまで懸合つて下さるなんて、あんまり皆さんに濟みませんわ。

國分。おまへも解らない女だなあ。先刻から俺が云つてゐる通り、このストライキは決しておまへ一人の爲ぢやないんだよ。みんな職工自身のためにやつてゐるんだ。それあ成程此の直接の原因は、おまへのその怪我に在る。併し俺たちのストライキの目的は、何もおまへ一人のために會社から金を取つたり、又萬一俺たちが負傷した時の先例を造つて置くばかりぢやないんだ。實はこれを機會にして戰爭以來一度も上げた事の無い工賃

を、三割増にしようと企てゝゐるんだよ。

ひで。ではようございますが、わたしの爲ばかりだとすると、ほんとうに心苦しくて、……

國分。實は俺たちはもう疾うから機會を狙つてゐたんだ。長い年月の間に少しづゝ溜めて來た不平が、俺たちの體の中でうづ〳〵し切つてゐたんだ。さうして其捌け口を求めに求めてゐた所へ、丁度うまくおまへの事件が持ち上つたんだ。おまへは俺たちに只機會を與へて呉れただけなんだよ。

ひで。(少し身を起して傾聽してゐる。)

國分。(興奮した調子で)職工と工場主との間柄は、底を割つて云つて見れば、恰度睨み合つてる猛獸のやうなものだ。双方が互に飛びかゝる隙はないか、乘ずる機會は無いかと狙つてゐるんだ。さうして鳥渡でも隙が見えたり、機會が出來たりすると、猛然と襲ひかゝるものなんだ。だから俺たちは一刻だつて油斷しちやゐられないんだ。さうして常に彼等に對する反抗心を鋭くして置いて、何か鳥渡でも觸れるものがあつたら、容赦なく吾吾の權利を主張しなければならないんだ。

ひて。（了解したと云ふよりは、國分の興奮に對して、何とか調子を合はせねばならぬと云つたやうに點頭く。）

（一人の老いたる職工權爺、此の談話の途中頃より戸口の外に立つて、ぢつと中の樣子を伺つてゐたが、此時靜に障子を開いて入來り、かすかな會釋をして上り框に腰をかけ、國分の話を默つて聞いてゐる。）

國分。（老職工を顧み同情を求むるやうに）なあ權爺さん。俺たちは何も事を好んで、他人の爲にストライキをしてゐるんぢやないんだなあ。――かうして幾日もの賃金を犧牲にして、妻や子供に苦しい思ひをさせてゐるのも、みんな俺たち自身が可愛いゝからだ。俺だちだつてみんな人間なんだ。資本家たちと同じやうに、みんな幸福を望んでゐる人間なんだ。しかも吾々だけが工場の塵と埃を吸つて、毎日骨と身を削り乍ら、ただ得る處は額の皺を增したり、深くしたりするだけなんだから堪らないよ。――俺だちだつて彼等と同じ人間なんだ。たつたそれだけの事が、誰にでも解り切つてゐる事が、彼等にはほんとに解つてゐないんだ。俺たちはせめてそれだけでも、彼等に思ひ知らしてやりたいんだ。ひて。（少し起き直つて）ほんとにさうですわねえ。

權爺。（答へず。ぢつと寅治を見るのみ。）

國分。なあ權爺さん。おまへさんの其齡になつたら、俺たちのやるこんなストライキなぞは、下らねえ騷ぎに見えるかも知れねえ。併し俺たちは決して、一時の血氣にばかり驅られて、こんな事をしてゐるんぢやねえんだぜ。それやあの社長が憎いと云ふ、小さな感情問題もあるには違ひねえ、が併し少くとも俺だけは、根本的にもつと大きな事を考へてゐるんだ。俺はこれを將來の人間のため、未來の勞働者のために犧牲になつてやつてゐる積りなんだ。どうせ此の資本家と勞働者の階級戰は、もう百年や二百年はどうしても續くだらう。俺たちの生きてゐる今日までに、もう何百年と云ふ闘ひを續けて來て、此の先まだ何年かゝるか解りはしないんだ。だから假令、俺たちが今力がなくて敗れたにした所で、今かうやつて置いた事は決して無駄にはならない。將來きつと俺たちの死屍を乘り越え、俺たちの大切に養ひ育てゝ置かうとする、此の尊い職工の團結心と反抗心を以て、きつと資本主と對抗する人が出て來るに相違ないんだ。さうしたら世界は平等に利益を配分するやうになる。世間は口先ばかりでなく、心から勞働の神聖を認めて、

勞働者をほんとうに尊敬するやうになる。俺はさう云ふ世界を夢に見てゐるのだ。吾々が大手を振つて街道を歩けるやうな時代を心に描いてゐるのだ。あゝ、さうなつたらどうだらう。もう町裏の汚ない溝地に、煤けた長屋も見當らなくなるし、夕方場末を歩いても、母の貧しい乳を求めて泣く赤子の聲も聞えなくなるんだ。あゝさうなつたら、……ほんとにさうなつたら、どんなに俺たちは嬉しいだらう。なあ權爺さん。

權爺。（低く）あゝさうなつたら……ほんとにさうなつたらなあ！（立上つてそろ〳〵と出て行く。そして戸口の處でぢつと振り返り）だが、さうなるまで俺は生きちやゐられねえだらう。（出て行く。）

國分。（默つて見送つてゐたが）一體何をしに來たんだらう。

ひで。（感動して身を起きうとして、傷める片腕に觸れ、痛さに思はず聲を立てる。）あいたたた……。

國分。おや、どうしたんだ。……

ひで。いゝえ、今起きようとしてつい……あいたたた。

國分。（傍に寄つて）起き上らうとなんぞするからいけないんだ。さあ、ぢつとして寢ておいで。（と抱くやうにして横にする。）

ひで。ほんとうにいろ〳〵濟みません。お話を伺つてゐる中に氣が立つて、思はず起き上らうとなんぞしたものですから。……

國分。さあ、かうして靜かにしてゐなくちやあ、――もうこれでいゝかい。（と床につける。）

ひで。えゝ、難有うございます。

國分。（抱へてゐた手を離さうとして、再びぢつとひでの顏を見る。突然激しい情熱に驅られて、急に熱い接吻を與へようとする。）

ひで。あら、いけません。（男の顏を拂ひのけようとする。此努力が又左腕の傷の痛みを引起す。叫ぶ）あいたたた……。

國分。（手を離しておど〳〵し乍ら）どうした。どうしたんだ。

ひで。いえ、何でもないんです。けれども、いけません。さうお寄んなすつちやいけません。（と咽び泣く）ほんとにいけないぢやありませんか。

國分。俺が惡かつた。勘忍してお呉れ。許してお呉れ。ほんとに俺は恥知らずだ。一時の

感情に驅られて、又こんな事をするなんて、……あゝ。……

ひで。そんな事をなすつちやあ、わたし此處に居られなくなりますわ。お世話になつてゐる譯には參りませんわ。昨晩だつてあなたは、あんな事をなさるのですもの。……

國分。あゝもう昨晩の事を云ふのはよしてお呉れ。俺はどうしてあんな氣になつたか解らないんだ。——ほんとに俺は心から悔いてる。どうかおまへも惡い夢だと思つて、すつかり忘れて了つてお呉れ。

ひで。それは私も忘れたいと存じますけれど、二度とあんな事をして下すつては、御恩になつてゐる事が出來ませんわ。あなたはあんな事をなさる爲に、私を此處へ引取つて下すつたのぢやないでせう。

國分。さう云はれると俺は恥しくて、ほんとに穴へでも入りたい位だ。俺は自分の高潔な主義を實行する必要上、おまへを此處へ連れて來てゐながら、あんな汚ない事をして了ふなんて。——ほんとに許してお呉れ。おまへが許して呉れると云はない中は、心苦しくて堪らないんだ。さうして俺はもう決してあんな事はしないから、安心して此處にゐてお呉れ。

ひで。わたしが許すの許さないのつて、そんな事をいつまで怒つてやしませんし、かへつて嬉しく思ふ位ですけれど。どうぞあなたも清いお心で、私を此處に置いて下さるやうにお願しますわ。私はもう別に行き處つて無いんですもの。

國分。そんなら此處にゐて呉れるのだね。

ひで。えゝ、それは私の方からお願するのですわ。

國分。それで俺も安心した。

ひで。ほんとに御世話になつてゐながら、我儘ばかり云つて濟みません。

國分。いや。そんな事は決してないよ。——けれどもねえひでちやん。おまへがかうして俺の家にゐるのも、或ひはもう僅かな時日かも知れないよ。おまへにはまだ話さなかつたが、實は遲くも今夜中には、どつちともすべての解決がつく筈なんだ。町會議員の田中さんの口きゝで、今日の五時には此方の委員が、向うの人と會見する事になつてゐるんだが、何でも田中さんの話によると、今日東京へ行つてゐた息子が歸つて來て、內外

の事情を調べて見て、此方の要求を聞きたいと云ふんだ。けれども、どうせ横暴社長の息子だから、一筋縄ぢや行かないだらう。だからうまく行つたにした所で、もう一二度の折合はつけなくちやなるまいが、それにしてもおまへの事は、近い中にどうにかなるだらう。居辛くてもそれまでの辛棒だよ。

ひで。あら、又そんな事を仰有つて。——けれども私の事が早く定れば、あなたにも此上御迷惑をかけずに濟むし、私も安心致しますわ。ほんとにその息子さんとやらが、物の解つた方だとようございますねえ。

國分。さうさ。それなら少しも文句なしに、吾々の事も早速定つて了ふんだ。此方の要求には一つだつて無理はないんだからな。

ひで。矢つ張り今の社長さんのやうに、情知らずだつたらどうしませう。

國分。なあに此方からは一歩も引かないばかりさ。どんな事があつたつて、此方の要求が徹らない上は、此のストライキはやめやしない。

ひで。（暫らく沈默してゐたが決然と）ねえ國分さん。

國分。何だい。

ひで。あの、私の事なんぞはもうようございますし、皆さんも大變困つておいでのやうですから、もう會社ともいゝ加減な所で折合つて、仕事をお初めになつて下さる譯には行きませんか。

國分。又かい。馬鹿！　いくら云つて聞かせても解らないのだね。いゝからおまへは默つておいでよ。

ひで。はい。

（二人暫らく沈默して了ふ。そこへ權爺の娘のおつなが入つてくる。おつなはもう二十七八の寡婦で、見窄らしい服裝の割りに元氣な顏色と聲とを持つてゐる。）

つな。（外から）御免なさい。

國分。誰だい。

つな。（戸を開けて）わたしよ。

國分。おつなさんか。まあお入んなさい。

つな。（入って來て）今日は。――おひでちやんの今日の御加減はどう？

ひで。難有う。大へんいゝんですの。

國分。まあ腫れだけはどうやらかうやら引いたやうですが、どうせ元通りには癒りますまいよ。

つな。どうしても切らなきやいけないんでせうかねえ。

國分。さうでもないんでせうが、少し手遲れになつてるんで、實は少々心配してゐるんですよ。

つな。ほんとに萬一片手が不自由にでもなつたらお困りですわねえ。

ひで。大丈夫ですわ、おつなさん。

國分。私も大丈夫とは思つてるんですが、何しろ傷が傷ですからねえ。

つな。ほんとに大切にしなくちや不可ませんわ。こちとらの命は手一本にあるんですからねえ。

國分。だから私共はかうして、ひでちやんの一生の保證になるやうな金を要求してゐるんですよ。

つな。ほんとにねえ。全くさうなくちやなりませんわ。

（間）

國分。あの、先刻うちのお爺さんが參りませんでしたか。

つな。えゝ、來ましたよ。何か用だつたんですか。

國分。いゝえ、別に何でも御座いませんが、何かこちら樣へ參つて失禮でもしやしなかつたかと、それで私も心配して參つたんですが。

つな。いゝえ、別に何でもありませんでしたよ。たゞ何にも云はずにふら〳〵と入つて來て、私が丁度このおひでちやんに話をしてゐたのを聞くと、何かぶつ〳〵口の中で云ひ乍ら、又ふら〳〵と出て行つて了ひました。出て行つてからもう十分位は經ちますよ。

つな。まあ、さうでしたか。――實は今日空きつ腹に御酒を頂いたんで、すつかり醉つて此方へ參つたのです。何でもストライキを止めさせるやうに云つて來るつて、大變な勢で家を出たんでしたが、ぢやあ此處でお話を伺つてゐる中に、醉が醒めて何とも云へずですよ。

に歸つたのでせう。ふだんはあの通りおとなしいのですが、酒を呑むと年に似合はず氣が立つて困るんですの。

國分。あゝそれで來たんですか。それぢや何とか云へばいゝのに、ただ默つて入つて來て、又默つて行つちまつたので、どうしたのかと思つてゐましたよ。

つな。私はほんとに又何か失禮を申上げやしなかつたかと、早速お詫びに參つたんですが、それでやつと安心しました。

國分。(輕い吐息をして)ほんとにあなた方のお苦しみもお察しするんですけれど、……

つな。いゝえ。私共でも決してこちらに對して、そんな不平を申してゐるのぢやないんですけれど、親爺も酒を少々頂き過ぎましたので、ついそんな氣を起したのでございますよ。

國分。お互ひにいろ〳〵云ひ分はあるでせうが、これも他人の爲ぢやないんですから、――それにもう少しの辛棒です。明日と云はず今夜の中に、向うと協定をする筈になつてゐますから、いづれにもせよ近日中には解決がつくんです。ですからもう少しの間辛棒して下さい。もう少しこらへてゐさへすれば此方の勝利になるんです。もう少しの間です。こゝで弱身を見せちやあ、今迄の苦心が水の泡になります。だからどうかお爺さんにも、苦しいでせうがもう少し辛棒するやうに云つて下さい。お願ひします。

つな。はい。よくさう云つて宥めます。そして私共はいつ迄でも辛棒致しますが、親爺はあの通りな舊弊者ですから、又何かと失禮な事を申しに參るかも知れませんが、どうぞ悪くお思ひにならないで下さいまし。

國分。悪く思ひなんぞ致しませんが、あんな御老人にまで心配をかけるかと思ふと、何だか濟まないやうな氣が致します。――(低く呟くやうに)併し吾々の將來を思ふと、まだまだこれ以上の犧牲と忍耐とが要るんです。まだ〳〵強く吾々仲間の弱音を、壓服しなければなりません。――何しろもう少しの間です。もう少しです。

(三人思ひ〳〵の無言に陷る。突然戸を開けて工場の給仕入り來る。)

給仕。(少し息を切らして)國分さん。おうちですか。

國分。うむ、ゐるよ。――何の用だ。

給仕。社長さんの言傳を云ひに來たんです。
國分。何だつて云ふんだ。
給仕。あのね。社長さんはね、今夜五時に皆さんと會ふ約束だけれど、急に思ふ仔細があつて、今すぐ此處へおいでになるから、あなたに其積りで待つてゐて下さいつて。
國分。今すぐ來るんだつて？　あの社長が自分でかい？
給仕。えゝ、あの若い方の社長さんが。——
國分。社長つたらあの胡麻鹽頭一人ぢやないか。若いも古いもあるもんか。
給仕。ぢやあの今日東京から來た、息子さんの方の社長さんです。
國分。さうか。息子が向うから來るつて云ふのか。それから？
給仕。それから、なるたけ職工の重だつた人を集めて置いて呉れつて。
國分。うむ、よし〳〵。それで？
給仕。それつきりです。ぢやようございますね。（歸らうと身構へる。）
國分。鳥渡待て。向うの用向はそれで解つたが、おまへに此方の用を頼みたいんだ。歸る序

でに濟まないが大町裏の町田の所へ寄つて、すぐ來るように云つて呉れないか。急用が出來たから直ぐ來るようにつて。
給仕。えゝ、承知しました。ぢや左樣なら。（と行きかゝる。）
國分。おい、鳥渡待つて呉れ。もう一つ頼みたい事があるんだ。どうせ序でだから北町端れの中村の所へも寄つて、皆を誘ひ合して來るように云つて呉れないか。
給仕。だつてあつちは廻り道だから厭だよ。
國分。廻り道だつて一町とないぢやないか。
給仕。（行きかけつゝ）厭だよ、厭だよ。（と急いで去る。）
國分。おい頼むよ。……線香花火の畜生！　とう〳〵行つちまひやがつた。
つな。（立上つて）國分さん。あの私でよければ中村さんの所へ行つて上げませう。どうせもうお暇しようと思つてゐたんですから、これからすぐ向うへ廻つて、皆さんに來るように言傳して上げますわ。（土間に下りる。）
國分。さうですか。そいつは濟みませんな。では御厄介ですがさうして下さい。お願ひし

ますよ。

つな。えゝお安い御用ですとも。では左様なら。おひでちやん御大事になさいよ。

ひで。有難うございます。左様なら。

國分。どうか呉々もお爺さんに宜しく。

つな。えゝ、歸つたらよく申しますわ。ぢや御免なさい。

（おつな退場する。寅治戸を閉めて戻つて來る。）

國分。さあいよ〳〵おまへの事も俺たちの事も、もう二三十分の中に決まるんだぞ。

ひで。よく行つて呉れるとようございますわねえ。わたしさつき權爺さんの事を聞いて、心で泣いてゐましたわ。

國分。甘く行きやあ何もかももう一時間と經たねえ中に解決がつくんだ。何だかさう思ふと俺は心細くなつて來た。

ひで。あら、どうしてですの。

國分。なあにさう思ふだけだよ。

ひで。向うで又何か六ケ敷い事なんぞ云ひ出しやしないでせうねえ。

國分。それあどうだか解らないが、かうなつてみると俺の今の心持は何だか氣持がいゝやうな惡いやうな、かう大きいものを待つてゐるやうな、一種妙な心持がするよ。何だか神さまがあつたら、禱りたいやうな氣がするよ。

ひで。五六日の間でしたけれど、御心配は容易ぢやありませんでしたからねえ。

國分。（妙に感傷的になつて）ひよつとするとおまへと俺とが、かうして一つ屋根の下にゐるのも、もうあと一時間とは無いかも知れないぜ。妙な緣だつたが、こんな事も忘れられない思ひ出の種となるだらう。ひでちやん。何だか少し殘り惜しいやうな氣がするぢやないか。

ひで。ほんとにねえ。私もさう思ひますわ。

國分。おや、おまへ泣いてゐるね。

ひで。（淋しく笑つて）いゝえ。

國分。さうか。ぢや明りの加減で目が光つたんだらう。まだ三時だつて云ふのに、厭に暗

くなつて來やがつたからな。

（と二人は顔をそむけて、暫らく沈默に陷る。間。戸を開けて職工町田入り來る。）

町田。やあ今日は。

國分。庄八さんか。さあどうかお上んなさい。急に招んで濟まなかつたな。

町田。なあにね、丁度此方へ樣子を聞きに來ようとしてゐた所だつたから、早速やつて來た譯さ。——おひでさんの工合はどうだい。

國分。うむ、今日は幾らかいゝやうだ。

町田。さうかい。それあいゝね。——それはさうと社長の息子が急に此方（こつち）へやつて來るつて話だつたが、——

國分。うむ、さうだ。今夜まで待ち切れないと見えるんだ。

町田。一體あやまりに來るのか、小言を云ひに來るのか。

國分。さあ、それはまるつきり解らねえんだ。が、いづれ一と談判しなくちやなるまいから、その前に此方の胆（はら）を十分に決めてかゝらうと思つて、急いで君たちを招んだのさ。

町田。うむ、それは此方の出やう一つで、今日の話はどつちにでも決まるんだから、打合せて置かなくちやなるまいが、一體他の連中はどうしたんだい。

國分。中村の所へ云つてやつたから、いづれ三瓶と岩田とを連れて來るだらう。それだけ揃へば頭株はすつかりだから、今日こそ胡麻化されねえやうにしつかりやらう。

町田。一體向うは何人來るだらう。

國分。さうさな。親爺と息子と會計と、此の三人はきつと來るだらう。

町田。息子つて奴に物が解つてゐるといゝが、會計と來ちやあ海千山千だからなあ。

國分。なあに、今度こそ瓢簞鯰は許さねえ。

（職工中村と三瓶入り來る。）

中村。やあ今日は。

三瓶。どうしたんだい、急に又、——

國分。うむ。向うからもう直ぐに此處へ來るつて云つて來たんだ。

中村。さうかい。向うから來るつて云ふのは、もう既に七分の弱味が見えてるね。ぢやあ

一つうんと強く出てやらうぢやねえか。

町田。それで今どんな態度を取つたものか、皆の胆を決めときたいと思つてるんだ。岩田はどうしたい。

三瓶。すぐあとから來る筈だ。

中村。態度つて今更決める迄もないぢやねえか。此處まで來た以上一歩だつて引かれやしねえ。

三瓶。でも君、そこは向うの様子次第で、臨機應變に少しは讓歩しなくちやあ。泣き言を云ふ譯ぢやないけれど、職工連中ももう大抵心の底では折合がつくやうに望んでゐるんだからな。

中村。だつて君、此處で鳥渡でも弱味を見せちやあ、何時迄たつたつて俺たちの要求は通らないぜ。

三瓶。併し、向うも十分折合をつけたいと云ふ氣合を見せてゐるんだから、此方で穩に出てやれあ、此際何とか收まりがつくと思ふんだ。此方で強く出れあ向うも意地だ。きつ

と頑固に出るに違ひないよ。どうせこんな爭ひなんてものは、もとを質せば感情づくなんだから、そこを出來るだけ忍ばなくちやあ、……

町田。なあに向うぢや算盤づくなんだ。

中村。たとひ感情づくでも算盤づくでも、此處まで曳いて來た車は後へは曳けねえ。今更弱音を吹くのは意氣地なしだ。

三瓶。と云つて無暗に頑張るのは猶馬鹿だ。

町田。おい〳〵、二人とも下らねえ云ひ合はよせよ。見つともない。

國分。（默つて此樣を見てゐるのみ。）

（職工岩田急に入り來る。）

岩田。遲くなつて濟まなかつたな。——何だかそれらしい人が向うからやつて來るやうだぜ。

町田。（戸の處へ出て見る。）うむ。さうらしいな。——所で今の問題は。

國分。（決然と）それは俺に任して呉れ。

町田。それあ任せるが、どう云ふ態度を取るのだい。

國分。（力强く）勿論强硬に出るばかりさ。それでいゝだらう。

町田。（鸚鵡返しに）うむ、いゝだらう。

中村。（大きく點頭いて）いゝとも。

岩田。（次いで點頭く）よからう。

三瓶。（力に壓されて仕方なく點頭く。）……。

（暫らく緊張した期待の沈默に陷る。）

町田。いよ〳〵來たやうだぜ。

（三浦淳吉、一人の子供に導かれて入口に現はる。）

三浦。（導かれて來た子供に）こゝだね。どうも難有う。（と入口の戸を開け、丁寧に帽子を脫いで御免下さい。國分寅治さんのお宅は此處ですか。

國分。左樣でございますが、あなたは？

三浦。私は三浦です。

國分。あゝ左樣でございますか、お待ちしてゐた所でした。さあどうぞこちらへ。御覽の通り穢苦しい所ですが。——

三浦。では少々御免下さい。（と上つて適當の座につく。）

（職工らも各々適宜な位置に密接して座を占める。しばらくは不安なる動搖が見える。）

町田。あの、あなたお一人きりですか。外には誰もおいでにならないのですか。

三浦。えゝ、わたし一人きりで上りました。却つて其方がいゝと思ひましたので。（と一度ずつと職工を見渡して後、最後に寅治に向ひ）失禮ですが、あなたが國分さんでございますか。

國分。はあ、私が國分です。以後どうぞ宜しく。（兩人强ひて丁寧なる禮を交す。）それからこれが町田で、（と一人々々指し紹介する）中村、三瓶、岩田と云ふ仲間です。集めて置いて吳れといふお話でしたから、重だつた者だけ招んで置きました。

三浦。それはどうも御苦勞樣でした。（皆々に禮をする。）

國分。それからこれが關口ひでで。——

ひで。（半ば身を起して禮をしようとする。）

三浦。はあ。（點頭いて）あゝ、どうか其儘にしてゐて下さい。どうか。——ひで。ではどうぞ御免下さい。（と打臥して了ふ。）

三浦。（少し改まつて）私は御承知でもございませうが、淳吉と申す淳藏の長男で、今迄ずつと東京に居つたものですから、つい皆さんにお近附を願ふ機會がありませんでしたが、これからはどうぞ宜敷お願申上げます。確かどなたとも初對面だと存じますが。——

三瓶。（少し進み出て）あの、わたしは三瓶ですが。——

三浦。三瓶さんと仰有ると、あの中町にあつた陶器店の息子さんの、……（とぢつと顏を見乍ら）あの三瓶清治君ぢやありませんか。

三瓶。えゝ、さうです。昔あなたと御一緒に遊んだ。……

三浦。さうですか。（思ひ出すやうに）確か高等二年まで貴方と一緒でしたつけねえ。——あなたも隨分變りましたねえ。

三瓶。何しろあれからすぐ親爺が亡くなつて了ひましたので、……

三浦。さうでしたか。それは又、……で只今は、……何だか大變顏色がお惡いやうですが、どこか御病氣ぢやないんですか。

三浦。いゝえ、別に、……

町田。（皮肉に）なあに飯をたんと食はないからですよ。唯それだけの事なんです。それが病氣だと云やあ、わし共はみんな病氣なんですよ。

中村。これこそほんとの慢性病なんです。

三浦。……（ぢつと下を向いて默つて了ふ。）

（しばらく沈默。此時一人の職工らしき男、入口から默つて覗きゐたりしが、以後對話の進むにつれて、一人二人づゝ附近の貧しき男女、子供など入口に集り來り、だん〳〵其數を增し來つて、曲の終る頃には、土間入口は貧しき群集によつて塞がる。此等の人物は互に私語き又は唸るのみにして、對話の中には交渉し來ることなし。）

國分。（膝を進めて）で、今日急にこちらへおいでになつた御用向は？

三浦。えゝ、それは只今申し上げます。——先づ何よりも前に皆さんにお話申上げて置きたいのは、私は何も一時的な仲裁に此方へ參つたのでなくて、云はゞ永久にあなた方と、行動を共にしようと云ふ決心で參つた事でございます。

國分。（少し呆氣に取られて）はあ、……

三浦。私は大學を出て兩三年と云ふもの、東京の方に就職して居りましたので、此方の會社に就ては殆んど知る所がなかつたのです。すると突然此度の同盟罷工が起つたので、初めてそんなに悪い事情があつたのかと、大へん驚いたやうな次第なんですが、何分向うには仕殘した用事があつて、それを片づけぬ中は來る事もならず、一人でやきもきしてゐたのですが、やうやく昨日それも片附いたので、急いで歸つて參りまして、實は今日一と先づ事情を調べて見たのです。

町田。尤も會社の帳簿だけでは、此の事情はよくお解りにならないと思ひますが。——

國分。まあ餘計な事は云はないで、默つてお話だけは聞いて了へよ。

三浦。いや、お說の通り、確かに帳簿だけでは解りません。のみならず、あなた方の事情に就ては、私は精神的にも物質的にも、殆んど何も知らないと云つていゝ位です。けれども會社側の方は、果して不當の利得を貪つてゐたかどうか、よく調べた積りです。而して其結果は、不幸にして諸君の云つて居られる通りなのを發見しました。私はそれを茲で具體的に申し上げる勇氣はありません。たゞ私は今迄父の取つて來た態度を、情けなく感じたと諸君に申し上げれば足ると思ひます。私は實際皆さんに對して恥かしいのです。

（皆々顏を見合せる。）

三浦。それは又あの舊弊な父に云はせれば、父らしい申譯があります。けれども公平に見て私さへ、會社の施設は悪過ぎると思ひます。殊に關口……ひでさんとやらの場合でも、決して正しい賠償をしてゐるとは云へません。ですからそれを根據にして、職工の待遇を改善せよと迫られても、それは全く正當な要求なのです。それで私は今日から斷然、父に向つて今迄の態度を改め、それと同時に責を引いて、父に社長の職を引退するやうに勸めたのです。もう年齡も年齡ですし、場合も場合だししますから、世間への手前、又あなた方との折合の上から云つても、父が直接工場の管理にあたる事は遠慮して貰うやうに勸めたのです。

國分。けれども、社長さんはそれを聞入れましたか。

三浦。父も意地でやめたくなかつたやうでしたが、とう〳〵説服して了ひました。

國分。では其後任にはどなたがなりますので？

三浦。それは私が引繼ぎます。甚だ氣を負うてゐるやうな形ですが、あの工場を父から受け繼ぐのは、子たる私の責任だと思ひます。私は御覽の通り年が若くて、實地の經驗とてはありませんが、理想と信念だけは持つて居ります。全力を盡してあの工場をよくして見せます。斷じて私利私慾を營んだり、人道に悖るやうな事は致しません。而して昨日まで埃と血にまみれてゐたあの製絲場を、輝くやうな「理想の工場」にして見せます。それが私の抱負なのです。

國分。それではもう今日から、あなたが社長さんなのでございますな。

三浦。さうです。此處へも社長の責任を以てやつて來たのです。

國分。では改めて社長さんの口から、はつきり承りたいのですが、御抱負などは兎も角として、第一手近な私共の問題はどうなるのでございますか。それを何より眞つ先にお伺ひしたいので。——

三浦。それは、私も只今申上げようと思つてゐた所でした。では改めてはつきり申します。——賃金三割增と云ふあなた方の要求は喜んで私の方から應じます。猶其上によく私共の方の利潤を調査して見て上げられるものならもつと引上げようと思つて居ります。（群集私語し交す。）ですからどうでせう。あなた方も明日からすぐに工場へ出て働いて頂けないでせうか。

國分。吾々も元通りの職務についてゞすか。

三浦。勿論さうです。元通りに一人も洩れなく。——

國分。するとあなたは吾々に對して、少しも含む所がなく、此儘使つて下さると云ふんですな。吾々のやうな所謂危險分子をも。——

三浦。吾々は寧ろあなた方を尊敬したく思つて居ります。さうして先程も申上げた通り、あなた方のやうな自覺した勞働者諸君と共に、相携へて「理想の工場」を作り上げようと思つてゐるのです。

國分。さうですか。あなたの御心はよく解りました。——おいみんな！　此の新らしい社

長さんが仰有るには、明日から、賃金は三割上げて下さるし、これ迄通り一人も洩れなく使つて下さると云ふんだ。別に異議はあるまいな。

（皆々點頭き又は「無い、無い」などゝ叫んで同意を表す。）

町田。それはいゝが、おひでさんの事はどうなるんだい。

（皆々ひでを顧みる。）

三浦。關口さんの事も惡いやうにはしない積りです。さうして差當り先づ其傷が全癒するまで、私の手で太田病院へ入院して頂かうと思つてゐたのです。あそこなら私の友人の經營でもあり、設備も割合に整つてゐますから。あそこで十分療養させた上、猶其上の御相談に致したいと思ひますが、どうでせう皆さんの御意見は。尤も本人がお厭だと仰有れば又何とか別な方法も御座いますが。——

國分。さうですな。私共はこの人の幸福を願つてるばかりなんですから、それに勿論不服のある筈はございません。——尤も療治さへ行屆けば、入院する程のこともありますまいけれど。——おひでちやん、どうだいおまへの考へは。

ひで。（目を睜つてゐるのみにて答へず。）

三浦。どうです、一と先づ太田病院へ入院して呉れませんか。（近よつて）まだ餘程痛むんですか。

ひで。それほどでもありませんけれど。——

三浦。（靜にひでの顏を見乍ら）ひどく衰弱してゐるやうですが、毎日熱でもあるんですか。

ひで。（涙ぐましく）いゝえ。

三浦。（何となく可憐さに引込まれて）痛い方の手と云ふのはこちらですか。

ひで。あら。（低く）よごれて居りますから、お觸りになつちやいけませんわ。

三浦。（ぢつと見て）どうです、私の云ふ通りにして下さいますか。

國分。どうだね。それとも此處で療治するかい。

ひで。あのわたし……そんなに迄して頂いていゝんでせうか。

三浦。いゝえ、なあに、私の方からお願するんですよ。

ひで。ではどうぞ宜しく。……

三浦。さうですか。早速御承知下すつて難有う。ではすぐ入院するやうに取計らひませう。

（國分らに）それで宜しうございますね。

國分。（强ひて冷淡に）えゝ異存はありません。

町田。あゝ、これで一と先づ決まりはついたな。

三浦。さうです。これから初めて、吾々は建設の時代に入るのです。及ばず乍ら私も献身的に努力しますから、一つお互に信頼し合つて、共同して模範的な工場にしようぢやありませんか。物質的に工場の規模は小さくとも、精神的には立派な大工場にしようぢやありませんか。私は一生懸命模範的な工場主たることに努力します。諸君もどうぞ模範的な職工となつて下さい。さうしてお互ひに燦然たる模範工場を樹立しようぢやありませんか。

（群集の中で誰かゞ「アーメン」と叫ぶ。抑へ切れぬ哄笑。）

國分。（群集に向ひ）何を云ひやがるんだ。社長さんは折角模範工場を立てゝ、縣廳からでも表彰されてえと仰有るんぢやねえか。それを茶化してどうするんだ。馬鹿め！

三浦。（此の暗諷に思はず眉をひそめたが、强ひて不快な心持を抑制して默つてゐる。）

（此時、國分の叱咤にやうやく靜まりかけた群衆を掻き分けて、先刻のおつなが顏色をかへて入り來る。）

つな。國分さん、大變です。うちの親爺が死にました。

町田。何だつて？

つな。親爺が裏の路次で首をくゝつたんです。大變です早く來て下さい。

（群集動搖する。）

國分。（寧ろ平然と）さうか。とう〳〵やつたか。

三浦。一體どうしたんです。誰が死んだんです。

國分。權爺と云ふ老人ですよ。此の結果が待ち切れないで、とう〳〵死んで了つたんです。此のストライキの唯一の犧牲です。

三浦。（獨り言のやうに）さうか。矢つ張り俺の來やうが遲かつたか。

（皆々無言で、折から赤くさし込む路次口の夕日を氣味惡さうに眺める。）

（幕）

第二幕

太田病院の一室。

質素であるが居心地よげなる洋風の病室で、正面には廊下に通ずる戸（ドア）、右手壁には稍稍大きな窓がある。室の中央に白い衝立があつて、部屋は二つに切られてゐる。其右手の方には、窓の下に病床を据ゑて、關口ひでが横はつてゐる。窓からは明るい日光がさし入つて、病床の白いシーツに注いでゐる。左手の方には一脚の卓子があつて、其周りに椅子が二三脚、病室用の器具などが置いてある。幕あくと看護婦の田村が、病床の傍の椅子に坐つて、雜誌か何かを讀んでゐる。ひで子は病床から默つて雲を見てゐる。

ひで。（靜な物倦げな聲で）田村さん、もういゝでせう。まだ不可なくつて。

田村。（雜誌を伏せて時計を見る。）さうですね。もう七分過ぎましたからいゝでせう。

（看護婦は立上つて病床に寄り添ひ、ひでの懷から驗溫器を取り出して、明りにすかして度盛りを讀む。）

ひで。熱があつて。

田村。いゝえ、六度五分きり、（體溫表に記入して）全く平溫ですわ。

ひで。いつになつたら退院できるのでせう。

田村。もうすぐですわ。だからそんなに御心配なさらなくてもよくつてよ。

ひで。別に心配は致しませんけれど。……

田村。もうお體の衰弱の方も、切開した痕も大抵癒つたんですから、安心して退院を待つてゐらつしやいよ。

ひで。お蔭さまでほんとうに難有うございました。

田村。いゝえ。ほんとにお世話が行き屆きませんで。——

ひで。ほんとうにあなたのやうな御親切な方が、此處にゐて下さらなかつたら、わたしどんなに心細かつたでせう。社長さんは毎日御見舞に來ては下さいますけれど、長くて一

時間とは居て下さらないんですものね。

田村。あら私の親切なんて、これが職業ですから何でもありませんけれど、社長さんの御親切なのには私共でさへ感心して居りますのよ。あゝして毎日お見舞ひに來て下さるなんて、外の方には迚も出來やしませんわ。

ひで。あなたはさう思つてゐて下すつて。

田村。えゝ。何故。

ひで。でも外の方は、さうばかり取つて下さらないんですつてねえ。

田村。ではどんな風に思つてゐるんでせう。

ひで。外の人々はね。社長さんが私の所へいらつしやるのは何か下心があつての事で、只の親切ばかりではないと云ふんですつて。社長さんと私とがをかしいと云ふんですつて。

田村。まあ、ほんとう。

ひで。ほんとに私位不幸な女はありませんわ。一生日陰者になつて了つて、人の御親切を受けるのさへ氣兼ねしなくちやならないんですもの。

田村。隨分ひどい事を云ふ人たちねえ。——でもそんな事をどなたからお聞きになつて。

ひで。社長さんからお聞きしたのよ。昨日おいでになつた時に、さう云つてゐらつしやつたわ。——あの、自分は今迄毎日のやうに、此處へ訪ねて來たけれども、此頃世間の噂を聞くと、何だか妙に誤解されてゐるやうだから、これから少し來るのを遠慮するが、決して惡く思つて呉れるなつて。呉々もさう仰有つたわ。それあどうせそんな事を云ふのは、ごく僅かな馬鹿者ばかりだらうから、別に氣にしてゐる譯ではないが、そんな所から自分の親切が却つて無になつては、お互ひにつまらないからつて、目に涙を溜めて仰有るのよ。わたしも泣いたわ。だつてあんまりなんですもの。そんな事を、……ねえ。あんまりひどい事を世間の人が云ふんですもの。

田村。ほんとにねえ。お察し申しますわ。では今日から社長さんは、御見舞に來ては下さらないのですか。

ひで。えゝ、ですから今日はもうおいでになるまいと思ひますの。わたし、だから先刻から悲しくて悲しくて、心で泣いてゐたんですわ。

田村。ぢや淋しうございますわね。――でも職工長の國分さんて方は、今日あたりおいでになる時分ぢやなくつて。

ひで。あの人は忙しい身體ですから、來ても一週間に一度位ですわ。それに見舞ひに來て下すつても、何だかあの人怖いやうな氣がするんですもの。

田村。さうねえ。男らしい方ですけれどねえ。

ひで。あなたは社長さんお好き？

田村。えゝ。――あなたは。

ひで。わたし？　わたし何とも思つてやしないことよ。

田村。あらさう。だつてそれぢや社長さんに濟まなくはないの。あんなに御親切に面倒を見て下さるんですもの。あなたはほんとに幸福よ。わたしだつてあなたのやうに幸福になれるものなら、いつでもあなたと同じく片腕位切つてもかまはないと思ふわ。

ひで。あら、何故。

田村。だつてあなたが苦しんでゐらつしやれば、皆さんがすつかり同情して下さるし、今度は又あゝ云ふ親切な社長さんが、かうして病院に入れて、始終見舞ひに來て下さるんですもの。

ひで。それあかうしてゐる中はようございますけれど、もうこんな片輪になつちまつちやあ人さまが相手にもして呉れないでせうから、此の先どうして暮らして行けるか、わたしその事を考へると、いつそ此儘死んで了ひたうございますわ。

田村。だつてそれあ社長さんの方で、又どうにかして下さるんでせう。いくら世間の人は殘酷でも、あなたのやうな素直な氣立と、いゝ御器量とをもつてゐらつしやれば、きつと捨てゝは置きませんわ。

ひで。いくらさう仰有つて下すつても、私考へると心細くて心細くて、……（と涙を溜める。）

田村。まあさう御心配なさらない方がよくつてよ。ね。（傍へ寄って）もうこんな話はよしませう。――あなたのお髪はほんとにいゝのねえ。御病氣上りの人とは見えませんわ。もうお身體の方は大丈夫なんですから、明日お髪をお上げなすつちやあどう？　きつと氣分がせいせいしますわ。束髪ならわたしにも出來ますけれど、あなた髪は何がお好き。

ひで。（少し晴々と）わたし矢つ張り銀杏返しよ。

田村。さう。きつと似合ふわね。

ひで。さうでせうか。いつか社長さんも銀杏返しが一番似合ふだらうつて仰有つてよ。男の癖に妙な事を仰有るのね。

田村。きつと丸髷もよく似合ふつて、仰有りたかつたのかも知れませんわ。

ひで。まあ厭な田村さん。あなたまでそんな事を仰有るの。

田村。あら御免なさい。怒つちや厭よ。——でもほんとに銀杏返しに結つて御覽なさいな。きつと似合つてよ。

ひで。けれどももう今日は遲いから駄目だわね。今日は之から何をしませう。

田村。ぢやあ又聖書でも讀みませうか。

ひで。あの本はわたしにはよく解らないんですけれど。

田村。でも折角社長さんが讀むようにつて、置いて行つて下すつたんですから。

ひで。さうねえ。ぢやあ少し讀んで下さいな。

（看護婦卓子の上から革表皮の聖書を持ち來り、椅子を病床に近く引寄せてページを繰る。）

田村。どこまで讀んだのでしたつけねえ。

ひで。わたしも覺えてゐませんわ。

田村。（頁を繰り乍ら）路加傳第六章と、あゝ此處からだわ。

（形を直して讀み初めようとする。途端に戸を輕く叩く音がする。看護婦は本を伏せて立上る。）

田村。あら誰方（どなた）かしら。（立つてゆき乍ら振返つて）きつと社長さんよ。（急いで戸を開ける。）

（三浦淳吉の從妹とし子入り來る。手に水菓子の籠を携ふ。現代的な美貌。美しき外出着。）

田村。（少しどぎまぎして）あの、どなた様でゐらつしやいますか。

とし。わたしは三浦俊子でございます。今日は兄がこちらへ參れなくなつたものですから、かはりに私が御見舞に上つたのでございますが、……

田村。あゝ左様でございますか。ではどうぞこちらへ。（椅子を薦める）

ひで。私が關口でございます。わざ〳〵どうも難有うございます。

とし。兄から始終お噂は承つて居りました。どうぞ以後はよろしく。（と丁寧に挨拶し合つて

後、田村に水菓子の籠を差出し乍ら）あの、これは誠に有りきたりの品ですけれど、御病人には何がお宜しいか解らなかつたものですから、……どうぞそちらへお納めなすつて下さいまし。

田村。左様でございますか。まあこんなお見舞まで頂戴しては、ほんとうに恐れ入りますわ。（ひでに）あなた、こんな結構な御品を頂いたんですよ。

ひで。まあ、ほんとに濟みませんわ、そんなにまでして頂いては。

とし。いゝえ、決してお禮を仰有るほどの物ぢやないんでございますよ。——今日は何か兄に用事があつて行かれないから、是非代りに行つて來いつて云ふものですから、急に參ることになりましたので、……却つて御邪魔ぢやありませんでしたかしら。

ひで。いゝえ、どう致しまして。

田村。今も二人で退屈し切つてゐたんでございますよ。（椅子を薦めて）まあどうぞお掛け遊ばして。

とし。難有うございます。では失禮いたします。（腰をかける）あの、御氣分はいかゞでございますの。

ひで。お蔭さまで大變宜しうございます。もう少ししたら退院が出來るかと存じますが、ほんとに何から何までお宅のお世話になりつゞけで、……

とし。いゝえ、そんな御心配は要りませんが、御不自由なお體におなりなすつては、嘸お心細くいらつしやいませうねえ。

ひで。でもみんな運とあきらめて居りますの。

とし。ほんとに御不運でしたわねえ。

（しばらく沈默。）

ひで。あの、誠に妙な事をお伺ひするやうですが。お宅の皆さま方は私の事を、憎い女だとお思ひになつてゐらつしやいませうねえ。

とし。まあ、どうしてそんな事をお聞きなさいますの。そんな事がある位なら、かうして兄や私なぞがわざ〳〵參る譯がないぢやございませんか。

ひで。でも私のためばかりに、いろ〳〵な事が起つて、御迷惑を掛けたのですもの。先の

社長さんなどはさぞお怒りだらうと存じますわ。

とし。先の社長つて叔父さんの事ですか。叔父さんならあんな人ですから、何と思つてゐるか解りませんが、わたし共はみんなあなたに同情してゐるんですよ。叔父さんは別ですわ。

ひで。叔父さんつて、先の社長さんはあなたのお父さまぢやないんですか。

とし。えゝ、叔父さんですわ。なぜですの？

ひで。だつて、あなたは今の社長さんと御兄妹でゐらつしやるんでせう。

とし。あら淳吉さんとはね。ほんとは従兄妹なんですけれど、兄さんと呼んでるんですわ、小さい時からさう云つてるんですもの。

ひで。まあさうですか。わたしはほんとの御兄妹とばかり思つて居りました。——ではあの、小さい時からのお許婚でゐらつしやるんでございませう。

とし。（赧くなって）あら、そんな事知らなくつてよ。決してそんな事はありませんわ。

ひで。まあ、わたし飛んだ失禮な事を申し上げて、どうぞ御勘忍なすつて下さいまし。

とし。いえ。何とも思ひはしませんわ。

（しばらく沈默。此の間に看護婦は水菓子二三個を剝いて皿にのせて持ち來る。）

田村。（皿を枕許のサイド・テエブルの上へのせて、先づとし子に向ひ）早速頂いた林檎を剝きました。どうぞ一つ召し上りなすつて。

とし。難有うございます。勝手に頂きますから。

田村。ではどうぞ。（ひで子に）あなたも召し上れ。

ひで。えゝ。

とし。（歸るそぶりを見せて）ではわたしこれで失禮しますわ。あの何か兄に言傳でも御座いましたら、私からさう申しますが。……

ひで。あら、まだお歸りなさらなくても宜しいぢやございませんか。まだお話もよく承らないんですもの。もう少しゐらしつて下さいましな。

田村。ほんにもつとごゆつくりなすつたつて宜しいぢやございませんか。關口さんも退屈し切つてゐるんですから。

とし。でも之からはちよく〳〵お邪魔に上りますから、今日はこれで失禮致しますわ。これから琴の御師匠さんの方へ鳥渡お廻りする事になつて居りますので、……

ひで。まあ左様でございますか。ぢやあ又ごゆつくり。……

とし。では御免下さいまし。(田村に)左様なら、お大事になさいまし。

田村。さやうなら。どうぞ社長さんに宜しく。

(とし子會釋して去る。看護婦見送つて戸口まで行き戸を閉めて歸つてくる。)

田村。まだほんの御嬢さんねえ。

ひで。さうねえ。——あの方の締めてゐた帶は何て云ふんでせう。あなた知つてて。

田村。厚板織とか云ふんぢやなくつて。

ひで。さう。いゝわねえ。

田村。わたし共には、呉服屋の店に並べてあるのしか見られないものよ。

ひで。いゝ御器量だわねえ。

田村。さうねえ。でも髪が少し赤うございますわ。

ひで。社長さんはどうして又あの方をお見舞によこしたのでせう。

田村。あなたが淋しがつてると思つてゞせう。

ひで。社長さんは今迄に一度も、あの方の事はお話しなさらなかつたわ。そして今日不意にお寄越しになるなんて、どう云ふお積りか解らないわ。

田村。從兄妹同志だつて云ふのに、お顔はさう似ちやゐませんわねえ。

ひで。(獨りて)さうだわ。きつとさうだわ。——

田村。あら、何がさうですつて。

ひで。いえ、何でもないのよ。只ね、……きつとあの方は社長さんの奥さんにおなりになるのだわ。きつとさうだわ。

田村。さうでせうか。さうならお似合だわね。お二人とも御立派でゐらつしやるから、……ねえ。——でもさつきはさうぢやないつて云つていらしつたわね。だからほんとに從兄妹同志だけなのかも知れませんわ。

ひで。さうねえ。(氣をかへて)もうこんな話はよしませう。他人の事を心配して見たつて

詰らないわ。それよりかさつき讀みかけた御本を又讀んで下さらない。

田村。ぢや少し讀みませうか。

ひで。解らないけれどそれを聞いてるといゝ氣持よ。

田村。（前のやうに座を占めて）ぢや讀みますよ。

（看護婦澄んだ聲で聖書を讀み初める。ひでは靜かに聞いてゐる。しばらく讀む。）

田村。聞き取りにくゝはなくつて。

ひで。（ものうげに）いゝえ。

（續いて可なり長い間――實演の際は五分間位――讀みつゞけてゐる。ひでは初めから眼を瞑つてゐたが、やがて寢入つて了ふ。靜かな寢息の音がする。看護婦は餘りに聽者が靜かなのに氣附き、讀みやめて靜かに「關口さん」と呼んでみる。返事がないので近寄つて顏を覗き乍ら「まあ」と云つて微笑む。そこで彼女は本を伏せてしばらくぢつと寢顏を見てゐる。それから枕許の藥罐を取り、行きがけに音のせぬように窓掛を引いて、そつと室から出て行く。長い間。外で戸を輕く叩く音がする。しばらく經つても返事がないので、そつと戸を開けて三浦が首を出す。さうしてひでの寢てゐる外、誰もゐないのを見て入つて來る。先づ病床に近寄つてひでの顏を覗き込み、しばらくぢつと見凝めてゐたが、惱ましげな吐息を一つして枕許を去り、衝立で仕切られた方の卓子の所へ來て、靜かに椅子に腰を下して懷中より煙草を出して點火する。しばらくして太田醫師が戸口から首を出す。）

太田。（覗き込み乍ら）三浦君。こゝかい。

三浦。しつ！　靜かに！　御覽の通り寢てゐるんだ。まあ入つたらどうだい。

太田。うむ。（入り來る。而して聲を低めて）よく寢てゐるな。君何なら僕の室へ來ないかい。病室で雜談も出來ないぢやないか。

三浦。さうさな。でも何だか此處が一番居心地がよくつてね。まあ眠りの邪魔にならぬ程度で、靜かに話をしようぢやないか。僕は其方が話しいゝんだ。

太田。一體君の話つて云ふのは何なんだい。

三浦。まあゆつくり話すから、（ひでの方を覗き見て）此方の隅の方へ來ないかい。

（二人は左手の隅の卓子の傍へ腰を下ろす。）

太田。何か込み入つた相談かい。

三浦。まあさう急ぎ給ふな。さう改まつて聞かれると恐縮するんだ。まあ煙草でも一つ取らないか。

太田。難有う。（一本煙草を取る。）

三浦。時に――君の方の仕事は呑氣でいゝね。

太田。どうして〳〵呑氣どころか。今やつと廻診を濟まして、鳥渡一と骨拔いた所さ。これから又一時間も經つと大忙しだよ。

三浦。まあそれは何より結構だね。

太田。それよりか君の會社の方はどうだい。うまく行つてはゐるらしいが。……

三浦。まあ着々歩を進めてゐる。まだ〳〵改良したり、新設しなくちやならぬ事も澤山あるが、初めから迚も完全は望まれないからねえ。何しろ、今迄が謂はゞ惡德の巢窟とも云ふべき程だつたのだから、僕の理想の實行も容易ぢやないが、それだけ又張り合があると云ふものだ。而してまだいろ〳〵内部に反對はあつても、いつか必ず僕の精神のある所が認められて、僕の思ふやうになる時代が來るに違ひないから、根氣よく少しづゝ改革して行つてるのさ。

太田。僕らから見ると君のやり口は、少し清教徒過ぎるとは思ふが、まあ一つ思ひ通りにやつて見るのもいゝさ。

三浦。いゝさなんて云ふ手緩い事ぢやなくて、實際せずにゐられないのだ。――まあ親爺のやり口なぞを見ると、こんなのは無論一例に過ぎないが、少なからず心を寒くするものがあるからねえ。かうだ、まあ聞いて呉れ給へ。此處に一人の美しい女工がゐるとする。さうすると親爺なんぞのやり口では、そいつを數ある女工の中から拔擢して、男工の所へ糸取り枠を運ばせる役に使ふのだ。すると自然男工の間には、一つでも多く自分の所へ枠を運ばせたい希望から、猛烈な勵精の競爭が初まるんだ。――とまあかう云つたやうな事でばかり、工場の能率を增進させようと計るんだからねえ。

太田。ふうむ、中々うまい事を考へるものだねえ。

三浦。ところがそれは何も親爺の妙案ぢやなくて、どこでも普通にやつてゐる手段なんだから驚くねえ。

太田。けれどもそれ丈の事ならば、別に大した罪惡でもないだらうがね。

三浦。それはさうかも知れない。併し其弊の及ぶ先を考へると、由々しい人道問題にもな

ると思ふんだ。――まあいつまでも枠の數位で競爭してゐれば無事だが、やがてもつと猛烈な裏面の競爭が行はれる。仲間同志が反目する、嫉妬する。時とすると黨に分れて奪ひ合ふ。而して其結果は多くの場合、渦中に立つた可憐なる女工を悲慘な運命に陷れて了ふんだ。

太田。ふうむ成程、それはさうだらうね。

三浦。此處にゐる（とひでの方を見やつて）關口ひでなぞも、危ふく其一人になる所だつたのだ。今でこそ此處にあゝして白い毛布に包まれて安らかに寢てゐるが、嘗てはあの女の周圍に誘惑が渦を卷いてゐたのだ。怖ろしい惡魔が爪を磨いで待つてゐたのだ。僕は幸にして彼女をさう云ふ狀態から救ひ出すことが出來たのを、今尙一つの誇りにしてゐる。さうして假令會社の方の改革が、どんな反對に遇つて挫折しても、あの女を救ひ得たと云ふ事實は、僕には實に最後の慰めになるのだ。あの女を救ふことが、僕の理想を實現する第一の階段だつたのだ。あの女は謂はゞ僕の理想主義の象徵なんだ。あの女が再びもとの境遇に落ちて、身を亡ぼすやうな事があつたら、其時こそ僕の理想は悉く破産したのだ。だから僕は何處までもあの女を守り立てゝ、決して又もとの悲慘な狀態に歸らせたくないと思つてるんだ。

太田。ふむ、それで。――

三浦。そこで僕が先刻から、君に話さうと思つてゐた問題になるのだが、實は僕この關口と結婚しようかと思つてゐるのだ。結婚して永久にあれを救ひたいと思つてゐるのだ。――君のお蔭で幸に切開の痕も癒り、身體も見違へるやうによくなつて來たから、もう近日退院してもいゝ事になるだらうが、退院してもさしあたり何處へ行つたらいゝか、どうして暮して行つたらいゝか、それは彼女の重大な問題なんだ。それは金で片が附くなら、あの女の一生の保障になるやうな額を與へてもいゝが、それとて限りのある金錢では、忽ち行きつく先きが見えてゐる。其上たつた一人の女の身では、此の誘惑の多い世界で、どうして身を誤らずに居られるものか。墮落は目に見えてゐる。それだのに僕はみすゝあの女を棄てゝ他人に汚させるのに忍びないんだ。だから僕は結婚して、彼女を完全に救はうと思つてるのだ。

太田。うむ。それは理窟としては僕にも異論はない。が、併し君、君にはその理窟以上に、闕口さんに對する愛を感じてゐるかい。それが何よりも第一の問題だと思ふが。——

三浦。それは勿論感じてゐる。今僕は心からあの人を愛してゐるのだ。尤も昨日まではそれをはつきりとは感じなかつた。が、偶然ある所である噂を聞いてから、我れと我心にも反省してみて、初めてそれに氣が附いたのだ。僕は君も知つてゐる通り、殆んど毎日のやうに此處へ來てゐる。それも初めは幾らか義務的に足を運んだ傾きもあつたが、其中にだん〳〵來ることが樂しくなつて來て、とう〳〵今では來ないではゐられなくなつて了つた。無論昨日まではそれほど自覺してはゐなかつたが、昨日偶然あそこの控所を通り合せた時、君の助手や看護婦たちが、僕の噂をしてゐたのを聞いて以來、改めて自分の身を振り返つて見て、少し恥かしい所があつたから、昨日も當人に理由を話して、世間の口が五月蠅いから來るのは遠慮すると云つて置いたのに、今日になつてみると處へ來たいと云ふ心が、可なりな强さで湧いて來るのを感じたのだ。而してやつとそれを堪へて、わざと他の用をしたり、とし子を代理に來させたりして見たが、考へれば考

へる程、僕にはあれと會ふことが必要になつて來たのだ。僕は今迄無意識にではあつたが、可なり激しい愛を彼女に對して持つてゐたのだ。さう覺つたらもう一刻もぢつとして居られなくなつた。それで急いで此處へやつて來て了つたのだ。

太田。成程、それで一通り君の心持は解つた。理性的にも感情的にも、此結婚は君に取つて合法なんだね。併し君は、……あのとし子さんと結婚する約束になつてゐたのではないのかい。さうだとすると此問題も、烏渡考へ直さなくちやならないが。——

三浦。家ではどう思つてたか知らぬが、僕にはそんな約束は斷じて無かつた。

太田。ふうむ。さうかい。僕は今迄とし子さんと君とは、將來一緒になるものだとばかり思つてゐたが、——で君は今の闕口さんの事を、一應家の人たちに相談してみたのかい。

三浦。いや、それはまだだ。するのは君が初めてだよ。

太田。君は家族の反對を豫期しないかい。

三浦。それはきつと在るだらうと思ふ。併し僕はそれを排して、決行するだけの勇氣もあると信じてゐるよ。今の決心はどんな反對に會つても枉げないつもりだ。

太田。うむ。君にそれだけの決心があるなら、僕も不肖ながら君の味方となつて努力しよう。

三浦。君が賛成して呉れたのは、僕に取つて何よりも心丈夫だ。ぢやあどうか宜しく盡力を賴むよ。

太田。それはさうと君はもう、關口さんの意向は確かめて見たのかい。

三浦。いや、それもまだだ。實は之から確めようと思つてゐるのだ。

太田。（更に聲を低めて）たゞ僕は凡ての前に、醫師として一應君に警告を與へて置くが、あ云ふ階級に屬する女は、あの年までには大概もう處女ではないと云ふ事だけ、はつきり考への中に入れて置き給へよ。

三浦。難有う。併し僕の愛はそんな事位、許すだけの力を持つてゐるつもりだから。——

太田。それはさうだらうが、得てそんな所から結婚後の破綻が起り易いからね。

三浦。もしそんな事が起るやうだつたら、僕の志は全然無になる譯だから、誓つてそんな結果には陷らせないよ。

太田。宜しい。それなら先づ何よりも當人の意志を確め給へ。事はすべてそれからだ。（時計を出して見て）ぢや僕は失敬するよ。（立上る。）

三浦。あゝ、ぢや何分宜しく賴む。

（醫師は通りがかりに一度ひで子を見、戸を開けて去つて了ふ。三浦あとの戸を閉めかけて見送つてゐる。突然ヒステリカルな泣泣が、ひで子の病床から起る。三浦驚いて振り向き、急いで病床に近寄る。）

三浦。どうした。どうしたんだ。夢にでもうなされたのかい。

ひで。（切れ〴〵に）いゝえ、いゝえ。わたし、……あの、……いまのお話を聞いてゐましたの。

三浦。えつ。ぢや今の話をすつかり聞いたのかい。

ひで。えゝ、少し、……

三浦。さうかい。それは猶よかつた。僕も實は聞いて貰ひたかつたのだ。（興奮を抑へて）では改めて僕から云ふが、僕はおまへに結婚を申し込むよ。おまへそれを承知して呉れるかい。それとも何か異存があるかい。

ひで。（かすかに）いゝえ、異存なんぞございませんが、わたしのやうなものが、……

三浦。ひでちやん。今はそんな事を云つてる時ぢやないんだよ。僕はおまへを心から愛してゐる。おまへの方でも僕を愛して呉れる事ができないかい。

ひで。いゝえ。わたしとうからお慕ひ申しては居りましたわ。けれども、……けれども、……結婚なんて事は、……一度も考へやしませんでしたの。……ですからあんまり急で、……わたし何と申上げていゝか解りませんわ。

三浦。ぢや愛して呉れると云ふのだね。それをはつきり云つてお呉れ。

ひで。えゝ、それは、……愛しますわ。

三浦。それならいゝぢやないか。二人はもう一つの心になつてゐるのだもの。もう結婚するより外に道はないぢやないか。それともおまへは他に約束した人でもあるのかい。

ひで。あら、そんな人はひとりもありやしませんわ。

三浦。ぢや他に君を思つてゐる人でもあるかい。

ひで。（鳥渡躊躇した後）いゝえありやしませんわ。

三浦。そんなら承知して呉れるね。承知して呉れるだらう。ね、ね。（と一方の手を取つて打振る。）

ひで。（かすかに嬉しさを包んで）えゝ。

三浦。難有う。――これでやつと僕は安心したよ。おまへを全く救ふことが出來たのだからね。

ひで。（默つて男の手に縋つた儘、喜びに泣き入つてゐる。）

（二人はしばらく同じ狀態で、歡喜に醉うてゐるやうに見えたが、やがて女は涙にぬれた顏を上げて、ぢつと男を見上げる。男もぢつと上から目と目を見合つた。この戀のポーズは暫らくつゞく。）

三浦。（やゝやゝ我に返つて）大へん顏が涙でぬれてゐるよ。拭いちやあどうだい。

ひで。（微かに笑つて）さう。汚ないでせう。（拭ふ。）まだですか。

三浦。あゝ綺麗になつた。それでいゝ、それでいゝ。――ぢや又來るからね。靜かにしておやすみよ。

ひで。（おとなしく）えゝ。

三浦。いろ〳〵な邪魔は入るだらうが、どこまでも二人は一緒なのだからね。いゝかい。

ひで。えゝ。

三浦。ぢや左様なら。

ひで。左様なら。

（三浦戸を開けようとする時、急に戸は外から開かれて、職工長國分寅治と行き會ふ。）

國分。（少しい驚いて）あゝ社長さんですか。只今お歸りでございますか。

三浦。えゝ。——君もお見舞ですか。

國分。えゝ、さうです。

三浦。さうですか。それは御苦勞ですね。ぢや失禮。（去る。）

（國分禮を返し、戸を閉ぢて入つてくる。）

國分。社長は毎日來るのかい。

ひで。（默つてゐる。）……

國分。社長が毎日來るんなら、俺も毎日來なくちやならないからな。

（と反抗的に三浦の去つた戸の方を眺める。）

（幕）

第三幕

三浦淳吉の家。

稍々廣き日本間。正面には右に床の間があつて、違ひ棚など宜しく、左に襖を立てた出入口が奥へ通じてゐる。右手は張り出し窓、障子等にて縁側と限られ、左手は襖が立て切つてあつて、それから玄關口へ通ずるやうになつてゐる。座敷の中央には紫檀の机と、陶器の火鉢とが置いてある。

幕あくと従妹のとし子が、床の間の前で活花を直してゐる。そこへ母のおふさが奥から出て來る。

ふさ。おや、おまへ一人かい。おひでは。

とし。髪結が來ましたので、お部屋で髪を結つてるんでせう。何か御用ですか。

ふさ。いえ、用といふ程でもないんだけれど、お父さんの羽織を疊んで貰ひ度いと思つてね。

とし。そんな事ならわたし致しますわ。こゝは今すぐ濟みますから。鳥渡待つてゝ頂けないこと。

ふさ。あゝいつでもいゝのだから、お急ぎでないよ。——よく活かつたねえ。

とし。(活け乍ら)五日も活け放しにして置いて、餘りみつともないんですもの。

ふさ。さうだねえ。

とし。此頃はすつかり怠け癖がついちまつて、何をするのも氣が進まなくて困りますわ。

ふさ。(默つてる。)

とし。ねえ叔母さん。

ふさ。なんだね。

とし。わたしあの、叔母さんに御相談しようと思つてた所なんですけれど、今丁度いゝ折ですから、聞いて下さらない。

ふさ。あゝ、聞きますともさ。

とし。あのね。此間兄さんからあつた太田さんへの縁談ね。あれを私お斷りしようかと思つてゐますのよ。――私もう暫らく獨身でゐたいんですもの。

ふさ。もう暫らくもう暫らくつて、いつ迄さうしても居られまいがね。

とし。わたしならう事なら、一生獨身でゐたうございますわ。

ふさ。さう云ふおまへの心持は、私にもよく解つてゐるんだけれどねえ。おまへにさう云はれると、私はほんとに氣の毒でならないのだよ。わたしの考へでは、おまへも知つての通り、どこまでも淳吉と一緒になつて貰ふつもりだつたのだけれど、あれがあんな我儘を云つて、どうしてもおひでを貰うつてきかないものだから、とう〳〵こんな事になつて了つたんだけれど、私はほんとにおまへには濟まなくて濟まなくて、……

とし。あら叔母さん。濟むの濟まないのつて、そんな事を仰有つちや困りますわ。

ふさ。いゝえ。ほんとに濟まないのだもの。――だから私もあの時一生懸命云ひ張つたのだけれど、……

とし。ですから叔母さんの難有いお志は、わたし一生忘れやしませんわ。けれどももうそんな昔の事、云つたつて仕方がありませんし、又兄さんにしました所が、ほんとにお愛しなさる方を奥さんになさるのが當り前ですもの。それを今度のわたしの結婚をお斷りする理由のやうにお取りなすつては、わたし却つて心苦しうございますわ。

ふさ。それはさうだらうけれど、私としては心に濟まなくてね。

とし。それは私にしましたつて、此儘こちらに置いて頂ければ此上もない幸福とは存じますし、おひでさん位のお世話は出來ると思ふんですけれど、……

ふさ。ほんとにこれがおまへだつたら、みんな水入らずで暮して行けたゞらうし、いろんな世話ももつと行屆いただらうがねえ。あゝして片手が無い上に、何にも家の事を知らないんだもの、私は人さまにこれが伜の嫁ですつて、ちやんと引合せる事も出來ないんだよ。

とし。でももう仕方がありませんわ。あゝして正式に御結婚なすつて、兄さんが可愛がつておいでなんですもの。

ふさ。私も今ではさうあきらめて、何にも云はないでゐるけれど、あゝ云ふ素性の賤しい

女だから、何か家名に障りでもするやうな惡い事でもなけれあいゝと思つて、ほんとに心配でならないのだよ。

とし。ほんとうよ。叔母さん。それだけはよく氣をお附けなさらないと、飛んだ事になりますわ。（急に聲をひそめて）ほんとはね。わたし少しあの人の事で訝しいと思ふ事があるのよ。あの人前に何かあつたんぢやないでせうか。

ふさ。何かつて。

とし。男の人か何かよ。

ふさ。それはわたし淳吉にも念を押したのだけれど、……おまへ何かそんな證據でも見たのかい。

とし。いえ、證據つて程の事ぢやありませんけれど、少し變ですわ。

ふさ。何が變なのだね。

とし。あの、おひでさんは姙娠してますわね。

ふさ。あゝそれは私も氣がついてゐたがね。

とし。兄さんと結婚なすつてからまだ三月ですわね。

ふさ。あゝさうだね。

とし。三月にしちやあ少しお腹が大きいとはお思ひなさらなくつて。

ふさ。さうさねえ。さうかしら。

とし。ぢや氣を附けて御覽になるといゝわ。わたしにはどうもさう思はれるのよ。

ふさ。家へ來る早々から、しよつちゆう身體が惡い〳〵つて云つてゐたから、ひよつとすると身持ぢやないかと思つてゐたが、ぢやあ矢つ張りさうだつたのかねえ。さうとすれあ此儘ぢや置かれない事だね。

とし。わたしもさう思ひますわ。兄さまの爲にも、お家の爲にも。

ふさ。ぢや私もよく氣を附けて見るからね。

とし。わたしの氣のせゐばかりぢやないと思ひますわ。わたしのお友達にもお嫁に行つて、もう姙娠した人がありますけれど三ヶ月位であゝ目立つものぢやありませんわ。

ふさ。さうだねえ。併し肝心の私がうつかりしてゐて、年齒のゆかぬおまへに敎へられる

なんて、私も年を取つたねえ。

とし。いえ。わたしだつて此間おひでさんと、御一緒にお風呂に入らなかつたら、氣が附かなかつたかも知れませんわ。でも、よく〳〵調べた上でないと解らない事よ。だから私も今迄幾度か申上げよう〳〵と思つてたんですけれど、證據もないのにそんな事を云つては、わざとおひでさんを陷れるやうに思はれますから、今迄默つてゐたんですわ。叔母さんも之からよく氣をお附けになつて、御覽になると宜しうございますわ。

ふさ。その外に何か氣附いた事はないかえ。

とし。えゝ、たゞそれだけですの。

ふさ。此後ともよく氣を附けてお呉れよ。——こんな事があるから私は反對だつたのさ。

とし。わたしだつて何も探偵のやうに、あの人の事を彼是目をつけたりしたくないんですけれど。もしそんな事だつたりすると、あんなに愛してゐらつしやる兄さんが可哀さうでございますからね。

ふさ。もしさうだつたら。淳吉がいくら許すと云つても、わたしが承知しないからいゝ。

（玄關の戸の鈴の音がする）

とし。おや、どなたかいらしつたやうよ。——ぢや今の事は、よく調べた上でないと解りませんから、叔母さんもまだ默つてゐらつしやる方がいゝと思ひますわ。

ふさ。あゝさうともさ。

（女中左手の襖をあけて登場。）

女中。あの、國分さんつて方がいらつしやいました。

ふさ。まだ淳吉は歸らないつてさう云つたのかい。

女中。はい。さうしたら奥さまでも宜しうございますから、お目にかゝりたいと仰有いますので。

とし。國分つて、職工長の國分寅治かい。

女中。左樣でございませう、きつと。——何でも奥樣をよく御存じのやうな口振りでございましたから。

とし。さうかいそれぢやあ（と意味ありげに）ねえ叔母さん。私たちは向うへ參りませうよ。

（女中に）そして其方を此處へお通しして、おひでさんにさうお云ひな。

女中。はい。（去る。）

（つゞいて女二人も急いで奥へ去る。やがて國分寅治、女中に案内せられて左手より登場。）

女中。只今奥様に申上げますから、どうぞ暫らく。

國分。はあ、御無理を願つて濟みません。

（女中去る。國分あたりを見廻してゐる。女中再び入り來り茶を薦めて去る。しばらくして、初初しい丸髷に結つたひでが奥の襖をあけて靜かに出てくる。さうして二人は顔を見合せる。）

ひで。（少し胸を轟ろかした樣子で、坐り乍ら）あなたでしたか。

國分。えゝ、私です。

ひで。（强ひて冷淡に）何か主人に御用がおありになるとかでございますけれど、わたしが代りに承りましても、よくは解らないだらうと存じますが、……

國分。いえ。その用も用ですけれど、實はそれはどうでもいゝんです。（聲を低めて）ただ私は烏渡あなたにお目にかゝつて、色々お話し申上げたり、お聞きしたりしたいと思つたものだから、思ひ切つて圖々しく上り込んだのです。社長のゐないのは勿化の幸と思ひましてね。

ひで。まあ、では初めつからそんなお積りだつたのですか。

國分。えゝ、少し冒險過ぎましたかね。

ひで。では甚だ失禮ですけれど、どうぞ直ぐお歸りなすつて下さいまし。私はあなたとかうして用もないのにお話をしてゐる譯には參りませんわ。

國分。まあ、さうまで仰有らなくたつていゝぢやございませんか。——そんなに御迷惑なんですか。

ひで。でも家の人も聞いて居りますから。——

國分。いゝぢやありませんか。別に悪い話をするんぢやなし、昔の友達が會に訪ねて來て、世間話の一つもして歸らうと云ふだけなんですからね。——それも外の人なら兎も角、あなたと私とは一つ釜の飯を食つて、一つ屋根の下に十日近くも居た間柄なんですからねえ。

ひで。どうかもうそんな前の事は仰有らないで下さいまし。そんな事を仰有つて、私を苦

しめないで下さいまし。

國分。（皮肉に）はゝあ、するとあなたのやうな女でも矢張り、見捨てた前の仲間の事を考へると、心が苦しくなると見えますね。――資本家の奴隷に身を賣つた罰です。身分不相應な結婚をした酬いです。

ひで。わたしもうあなたの仰有ることをお聞きする事は出來ません。どうぞお歸りなすつて下さい。お歸りなすつて下さい。（涙を溜めて）あんまりですわ。あんまりな事を仰有いますわ。

國分。さうまで仰有るなら歸ります。（と立ちかけて）、が、どうかそれならもう一言だけ云はして下さい。――今、私はついこんな惡口を申し上げましたが、併し、これで何もあなたを苦しめに來た譯ではなかつたのですよ。それどころか私はいつも、あなたの幸福を願つてゐるのです。而してあなたが一刻も早く、かう云ふ奴隷同樣な境遇を脫して、再び故鄕の吾々の所へ歸つて來るのを待つてゐるのです。――では左樣なら。（去らうとする。）

ひで。國分さん　鳥渡お待ち下さい。

國分。何ですか。

ひで。わたし其中にぜひ一つ、あなたにお話しなければならぬ事がございます。いづれ其時が參りましたら、聞いて頂きたいのでございますが。――

國分。何ですか知りませんが、私に關係のある事ですか。

ひで。えゝ、さうです。

國分。ではいつでもお聞き申します。

ひで。では左樣なら。（氣を取り直して）おせきさん、おせきさん。

（女中登場。）

ひで。あのお客樣がお歸りだから。

國分。ではどうか社長さんに宜しく。

（國分女中に導かれて退場。ひでは暫らく後を見送つて、ぢつと物思ひに沈んでゐる。とし子奥から出て來る。）

とし。あらもうお客樣はお歸り？

ひで。えゝ、あの何ですか、矢つ張りわたしでは解らない事だつたものですから、又お留守でない時に來て下さるやうに、さう云つて返して了ひましたの。

とし。さう。——あの方は職工長の國分でせう。

ひで。えゝ、さうでございますわ。

とし。あなた前にあの方の家にお居でなすつたのぢやなくつて。

ひで。えゝ。あのストライキの時分少しばかり。……

とし。あの人お幾つ位？

ひで。わたしよく存じませんわ。

とし。まだお獨りなんでせう。

ひで。さうらしうございますわ。——でも、どうしてそんなにあの人の事をお聞きなさいますの。

とし。だつて、……あの人はストライキの首領だつたのですもの。わたしどんな人かと思つてゐましたの。そんなに怖くもない人ねえ。

ひで。さうでせうか。

とし。さうぢやなくつて。わたしもつと髯の澤山な人かと思つてゝよ。だけと眼だけは少し怖いわねえ。

ひで。（興味なげに）さうですねえ。

とし。あの人あなたの恩人ですわね。

ひで。……と云ふ程でもないでせうけれど、……。

とし。だつてあの人がさきだちになつて、あなたの爲に色々して下すつたのでせう。（ひでの顏を讀むやうに）あなたあの人に感謝してゐなくつて。

ひで。それあ難有いと思つて居りますわ。

とし。たゞそれだけ？

ひで。あら、どうして？

とし。いえ、何でもないんですけれど。——

（しばらく不安なる沈默。玄關の方で戸の鈴の鳴る音がする。）

ひで。あら、お歸りのやうですわ。（急いで立上る。）

とし。さうね。

（二人は急いで玄關の方へ出て行く。「お歸んなさいまし」と口々に挨拶する聲が聞える。やがて淳吉を先にして、ひで、とし、女中ら出て來る。）

三浦。（ひでに外套を渡しながら）今日は歸りに太田の所へ寄つて來た。おまへが毎日工合が惡いやうだから、來て診て呉れるやうに云つて來た。だからもう直ぐ來るだらう。來たら早速一つ診て貰ふがいゝ。

ひで。（少し狼狽して）あら、だつてわたし何でもないんですのに。あれほど何でもないつて申上げてるのに、そんな御心配には及びませんでしたわ。

三浦。何だか毎日顏色がよくないやうだから、まあ見て貰つて置くがいゝよ。

ひで。だつて何でもないんですもの。ほんとにいゝんですもの。（外套を女中に渡す。女中それを持つて退場。）

とし。（つゞいて奥へ行かうとする。）

三浦。あゝとしさん、おまへに鳥渡話があるんだがね。

とし。さうですか、

三浦。矢つ張り太田の事だがね。今著物を着換へて來るから、此處に待つてゐて呉れないかい。

とし。その事なら私も申上げたいと思つてた所ですから、お待ちして居りますわ。ではゆつくりお著換へなすつていらつしやい。

三浦。ぢやそれから寛いで話さう。（ひでに）今日は之から又鳥渡、町長さんの處へ行かなくちやならないから、いゝ方のを出してお呉れ。

ひで。はい。（行きかけて）あの、わたしどうしても太田さんに診て頂かなくちやなりませんの。

三浦。さうして僕に安心させて呉れるのだよ。（とし子に）ぢやすぐ來るからね。

（二人は奥の間に入る。とし子獨り殘つて呆然と物を考へてゐる。しばらくして玄關の方に俥の來た音がして、つゞいてベルが鳴る。とし子立つて出て行く。「まあよくいらつしやつて下さいました」と云ふやうな挨拶が聞える。やがてとし子、太田醫師を伴うて登場。）

とし。さあ、どうぞこちらへ。

太田。（少しはにかんで）さつき三浦君からお話がありましたので、今丁度手隙だつたものですから、早速こちらへさし上りました。

とし。ほんとにお早々と、難有うございました。兄も只今歸つた所で、奥で著換へをして居りますから、どうぞ暫らくお待ち遊ばして。

太田。はあ。――何だかひで子さんがお悪いやうな話でしたが。――

とし。えゝ、少し悪いのかも知れません。

（しばらく沈默。二人は顔を上げて、偶然視線を合せ、あわてゝそれを外らして了ふ。）

太田。（思ひ切つて）あの僕の事はもう三浦君からお話があつたと思ひますが。……

とし。（惡びれずに）えゝ、承つて居りました。

太田。それで……？

とし。それで、……私のやうな不束者でも、それまでに仰有つて下さるのにつけ上つて、我儘を申すやうな譯ではございませんが、わたしも、……わたし相應にいろ〳〵考へた

い事がございまして、今迄のび〳〵に御返事も致しませんでしたが、どうぞお心に背くやうな事を申上げても、お許しなすつて下さいまし。

太田。いゝえ。それああなたの一生の大事なんですから、どうぞよく〳〵お考への上、どちらとも御返事下されば、私も彼是思ひ殘しは致しません。それに又實際僕にして見ますと、あなたの良人になる資格があるかどうか怪しいもので、……只もし資格が少しでもあるとすれば、それはあなたを愛する點に於て、どこの誰にも劣らないと云ふだけの事なんですから。――

とし。あら、そんな事を仰有つては、私なんぞ何と申していゝか解りませんわ。私なんぞにはほんとに分に過ぎて〳〵ゐるのは解り切つてゐるのですけれど、――あら、御免下さいまし。こゝでこんな事を申し上げるのでございませんでしたわ。

太田。僕もこんな話をする積りぢやなかつたのですが、厚顔しい事ばかり申上げて失禮しました。

とし。いゝえ、私こそ。――どうぞ御免遊ばして。

太田。ではあの私にはおかまひなく。

とし。いえ、あの、……兄も直ぐですから。……それにわたし別な話ですけれど少々あなたにお願がございますので。……

太田。改つてお願と云ふのは何ですか。私で出來る事なら何でも致しますが。……

とし。あの妙なお願ですけれど、今日あなたはおひでさんを御診察下さるのでせう。

太田。えゝ。そのつもりで上つたのです。

とし。あの、おひでさんは確に御病氣ぢやないと思ひますのよ。わたし確に姙娠だと思ふんですけれど、……

太田。はあ、僕もそんな事だらうと思ひました。それで？

とし。それであの妙なお願ですけれど、御診察なすつた上で、何ケ月位におなりだか、敎へて頂く譯には參りますまいか。

太田。そしてどうなさるんです。

とし。わたし叔母さんに賴まれましたの。

太田。あゝさうですか。そんな事ならお易い御用です。尤も診察したばかりでは、確とした所は解りませんから、御本人にお聞きなさるが一番ですよ。

とし。えゝ。それもさうですけれど、あなたの方からもお伺ひしたいのですから。どうかほんとの所をお聞かせなすつて下さい。

太田。えゝ、畏りました。

（三浦淳吉、奥より出て來る。）

三浦。やあ、もう來て呉れたのかい。知らずに茶を一ぱい飲んでたものだから、待たしてどうも濟まなかつたね。

太田。うむ。丁度手があいてゐたんで、取るものも取り敢へず來た譯さ。……どうだね、御病人は。今とし子さんに伺ふと、さう大した事ではなささうだが、……

三浦。うむ。別に惡いと云ふぢやなからうが、どうも樣子が尋常ぢやないと思ふから、まあ一つ診てやつて呉れ給へ。さうすれば僕も安心するから。

太田。ぢや早速拜見するとしよう。お部屋においでないのかい。

三浦。うむ。今女中に案内させるから待ち給へ。

とし。あのわたし御案内しますわ。

太田。それは恐縮ですな。

三浦。だがとしさん。おまへは僕と、……

とし。いゝえ。あの事なら今も太田さんとお話したんですけれど、もう少し考へさして頂きたいのよ。いづれ猶お歸りになつてからね。

三浦。さうかい。(太田に)それぢや君どうぞ宜しく。

とし。(太田に)ではどうぞこちらへ。

太田。どうも恐れ入ります。

(二人奥へ入る。三浦一人殘つて二人を見送り、少し笑を含んでゐる。そこへ奥から父の淳藏登場。)

淳藏。淳吉。おまへ一人か。

三浦。えゝ、さうです。

淳藏。どうだな、近頃會社の方は。相變らず職工に耶蘇教の說教をしてゐるかい。

三浦。(苦笑して答へず。)

淳藏。昨日もある處で、倉庫會社の前島さんに會つたが、あの人もかう云つて嗤つてゐたぜ。おまへの遺り口はまるで、飼犬を座敷に上げて置くやうなものだつて。犬つて奴は幾ら食つても、滿腹するつて事を知らないから、飼主が呉れれば呉れるだけ食つて了つて、別に難有かつたと云ふ顏もしないんだ。そして終ひにはそれにつけ上つて、ちつとやそつとの事をしたんでは、却つて手を嚙むやうになるだらうつてな。

三浦。嗤ふ奴には嗤はして置くがいゝです。どうせそんな頑固な人たちには、僕の考へなんぞ解るもんぢやないんですから。

淳藏。そこだて。わしもさう思つてるんだ。まつたくおまへの考は高遠過ぎて、俺たちには解らないんだよ。俺たちどころか誰にも、肝心の職工にも解らないんだ。

三浦。それあ今迄職工と工場主の間には、色々な惡い牆壁があつた爲に、僕の赤心から盡してゐる事も、一時は諒解されなかつたでせうけれど、幸に此頃は職工も私に信賴を持

ち初めた様子です。これから私の理想も、着々實現の緒につくに相違ありません。もう大抵今までの施設で悪い所は除いたし、新しい設備はそろ〳〵効果を擧げて來るし、私は此頃心から嬉しく思つてゐるんです。

淳藏。それあ大變結構だが、どうも收入は餘り思はしくないやうだね。どうせその理想とか何とか云ふやつは、金には緣の遠いものなんだらうが。……

三浦。まあ今に御覽なさい。私の心がすつかり職工に解つて、すべての職工が私と一つになつて、ほんとに精神的に働いて呉れる時が來れば、生產高はきつと今の倍位に上りますから。

淳藏。さうなつて呉れゝば俺も文句はないが、それが駄々つ子の夢でなけれあいゝがね。

三浦。何でも宜しうございます。私の手に社長の權利がある間は、私の好きにさせて頂きます。而して、どうしても私の考が行はれず、又その爲に惡い結果にでもなつたら、その時改めてお父さんのお指圖を仰ぎます。今そんなケチをつけて頂かなくともようございます。

淳藏。それあ好んで俺も云ひたくはないが、おまへのやり方が子供じみてゐて、先が見えてるから心配してゐるのだ。

三浦。子供じみてゐても何でも、私はやるだけやり通して見せます。御心配をして下さるにしても、まだ早過ぎるかと存じます。

淳藏。それあやれるだけやるのはいゝさ。たとへそれが駄目だつたにしても、おまへ一人の修業にはなるんだから。——兎に角おまへももう少し經てば、仁慈一點張りで行かない事が解るよ。

三浦。でもお父さんのやうに暴虐一點張りでは猶更行きますまい。

淳藏。まあさうは云はぬものだて。今にわかるからなあ。（と立上る。）

三浦。さうですとも。きつと今に解ります。

（父嘲笑を浮べつゝ退場。入れちがひに太田醫師登場。）

三浦。あゝ濟んだかい。どうも御苦勞だつたね。それで樣子は。

太田。（妙な笑を含んで）なに心配することはない。ありや病氣ぢやないよ。却つてお芽出度

だぜ。

三浦。それあ僕も感づいてはゐたが、……

太田。幸に外には何處も悪くないから、まあ精々大切にし給へ。猶少し君に話したい事があるから、暇だつたら今夜にも來て呉れないか。

三浦。それにとし子の事もあるから、今夜町長の處の歸りに寄らう。あれの返事を齎らして行くよ。

太田。どうも色々濟まないね。ぢや是非來給へよ。今日はゆつくりしてゐられないから、僕はこれで失敬する。

三浦。さうかい忙しい所を御苦勞だつたね。

太田。ぢや大切にし給へ。あとで健胃劑か何かよこすから、まあそんなものでも服用させときやあ、顔色なんざあ直ぐ癒るよ。ぢや失敬。

（太田醫師玄關の方へ退場。三浦見送つて出る。とし子奥から登場。）

とし。（見送つて戻つて來た三浦に）太田さんはもうお歸りになつて。

三浦。あゝ、今歸つたよ。ぢや約束によつて話を聞かうかね。

とし。あの、わたしその前に一つ兄さんに是非伺ひたい事があるんですけれど、聞いて下すつて。

三浦。改まつて又何だい。

とし。兄さんは嘸お厭でせうけれど、おひでさんの事に就て、是非お耳に入れとかなくちやならない事があるのよ。

三浦。どうしておまへはさうひでの事ばかり氣にするんだい。

とし。わたし何も氣にする譯ぢやないんですけれど、——みんなあなたの事を思ふからばかりですわ。あなたのお身に、悪い事がないようにと思ふからばかりですわ。

三浦。それなら難有く聽くよ。一體何だい、その話つていふのは。

とし。（改まつて）兄さん。あなたは心からおひでさんを愛してゐらつしやるわねえ？

三浦。それは云ふまでもない事だ。

とし。ではあの方は兄さんを、それだけ深く愛してゐらつしやるでせうか。

三浦。勿論愛して呉れてゐると思ふ。
とし。ほんとにさうお信じになつて？
三浦。うむ。さう僕は信じてゐる。
とし。どこまでもおひでさんの愛を純潔だと？
三浦　さうだ。
とし。もしこゝに兄さんのその考を、裏切るやうな事實が在つたらどうします。
三浦。そんな事實は絶對に在り得ないよ。
とし。でもあつたらどうします。あなた以外に愛を注いだ證據があつたらどうします。
三浦。そんなものはあり得ないと云つてるぢやないか。
とし。ぢやあ申しますがね。これは勿論證據と云ふ程のことでないかも知れませんが、私どもにはどうも不思議でならない事があります。聞いたら兄さんもきつとお驚きなさるに違ひありませんわ。
三浦。何だ。云つて御覽。

とし。兄さんがあの方と結婚したのは、やつと三月ばかり前ですわね。
三浦。さうだ。が、それがどうしたのだ。
とし。あのおひでさんは只今姙娠してゐらつしやるわね。
三浦。それは薄々僕も知つてゐた。
とし。太田さんによくお聞きなすつて？
三浦。別に精しく聞かない。只姙娠だとは云つて行つた。それで？
とし。あのおひでさんの姙娠は、どう見てももう五ツ月位なお腹ですよ。
三浦。五ツ月だつて？
とし。そら御覽なさい。その通りお驚なすつたでせう。やつと三月前に結婚なすつた方が、五ツ月位なお腹をしてゐらつしやれば、誰が見たつて不思議ですわ。
三浦。でも確にさうとは解らないぢやないか。
とし。太田さんも其位だつて仰有つてよ。——五ツ月前つて云へば、丁度あのストライキの時分か、遲くてもあの方が病院にゐらした時分ですよ。

（しばらくの間。とし子勝誇つたやうに見守る。）

三浦。（少し悲痛な聲で）ぢや別に不思議はないぢやないか。

とし。どうして不思議ぢやないんですの。

三浦。その頃から僕はあれを愛してゐた。

とし。ではあなたに覺えがあるんですか。

三浦。（低く、併しはつきりと）恥かしい話だが、ある。

とし。（意外な答に驚いて）まあさうですか。

三浦。（蒼白な顏を上げて）話はそれだけかい。

とし。えゝ。では、もう申し上げる事はありません。

（二人ともしばらく沈默。各々ぢつと考へ込む。）

とし。（突然ヒステリカルに）兄さん。疑つて濟みませんでした。どうぞお許し下さい。そして存分に叱つて下さい。わたしほんとに心まで醜い女なんです。手柄顏におひでさんの缺點を探し立てゝ、それであなたの愛を動かさうなぞと思つたのは、ほんとに何と云ふ

淺ましい心根だつたのでせう。わたしには今やつと兄さんのおひでさんに對する深い愛が解りました。そして私なんぞは到底、兄さんの愛を受ける資格のないのを知りました。私が今まで太田さんの緣談を延び〳〵にして承知しなかつた心の底には、いつかあなたの愛を受ける機會があるのを、ひそかに信じてゐたからでした。併しもうそんな事は思つても恥しうございます。あなたのおひでさんに對する愛は、ずつと〳〵深いんですものの。

三浦。さうおまへが打あけて呉れると、却つて僕が恥しい位だ。

とし。わたしもう決心しました。そして兄さんのお勸め通り、太田さんの所へ嫁きます。あの人はあれほど迄に仰有つて下さるのですから、私も出來るだけの愛をあの方に献げます。ですからどうぞ今迄の事はお許し下さい。

三浦。それぢやさう決心して呉れたかい。それで僕もやつと重荷を下したやうな氣がするよ。

とし。兄さん！　お許し下すつて。

三浦。あゝ、僕の方こそ！

（二人は感激の眼を見合せる。しばらく間。奥で母のとし子を呼ぶ聲がする。）

とし。はい。（立上る。）

三浦。ぢや今夜太田へさう云つていゝね。太田もきつと喜ぶよ。

とし。（微笑して）どうぞよろしくね。（退場。）

（三浦一人になると氣が弛んで、思はず惱しげな吐息をなし面を伏せて思ひに沈む。やがて氣を取り直して、微かに「さうだ。矢つ張り許さなくちやならない」と獨語する。しばらくして手を叩いて女中を呼ぶ。）

女中。（登場。）何でございますか。

三浦。あの奥さんにね。これからすぐ出掛けるから、羽織と袴を持つて來るように云つてお呉れ。

女中。はい。畏りました。（退場。）

（しばらくしてひで子、羽織と袴を持つて靜かに登場。）

ひで。もうお出掛けでございますか。

三浦。あゝ鳥渡行つて來る。

（二人は默つて著せたり著たりする。）

ひで。（著せ終ると共に、決心した語調で）あのお出掛けになる前にわたし是非お話しなくちやならない事があるんですが、……

三浦。（ある豫期の心持を匿して）何か大切な事でもあるのかい。

ひで。えゝ。是非申し上げなくちやなりませんの。あの、……私の身に就ての事なんですけれど。

三浦。そんな事なら歸つてからゆつくり話しちやどうだい。

ひで。いえいえ、只今是非申上げなくちやなりませんわ。もう此儘一刻でも默つてゐる事は出來ませんわ。——あの、わたしあなたに對してほんとに濟まない事を致しました。

（泣き乍ら）申し譯のない事になつて了ひました。

三浦。（悲痛な面持で）濟まないつて云ふのは、ひで子、おまへの腹の子の事を云つてゐるのかい。

ひで。あの、……それをもう……？

三浦。おまへが身持だと云ふ事は、さつきある人から聞いて知つた。

ひで。では今日太田さんから、すつかりお聞きなすつて。

三浦。いや、太田からではない。が、とに角おまへの姙娠が、五ツ月位だと云ふ事は聞いて知つた。おまへそれはほんとうかい。

ひで。はい。（泣崩れる）どうも濟みませんでした。わたしもとからあなたの妻になれる身體ぢやなかつたのです。

三浦。ぢやあそれが初めから解つてゐたのかい。姙娠してゐるのが解つてゐながら、僕の所へ來たのかい。

ひで。いゝえ、いゝえ、いくら恥知らずの私でも、まさかそんな事は出來やしませんわ。あの、見えるものは見えませんでしたが、ほんの一時の障りだと思ひまして。そんな事よりもわたし、あなたのお傍へ參れると思ふと、胸が一ぱいだつたものですから。——それだけは眞實でございますわ。

三浦。さうかい。——だがその相手は誰だい。併しこれは何もおまへを咎めるために聞へんぢやないんだよ。たゞ念のために聞いとくだけなんだ。

ひで。國分さんです。

三浦。そしていつ頃。

ひで。あの人の家にゐた時分ですの。ある晩夜中にふと眼をさまして見ますと、いつの間にかあの人の身體が私の傍にゐたんで、わたしはほんとうに吃驚しましたの。わたしそれつきり何も覺えちやゐません。

三浦。さうかい。僕はおまへがさう打あけて呉れたのを感謝するよ。

ひで。いえいえ。どうぞそんな事は仰有らずに下さいまし。かう何もかも申し上げたからは、わたしもうお家にはゐられないものと決心して居ります。ですからどうぞ御存分にお責めになつて、どこへでも突き出して下さいまし。どうぞお心の癒えるまで、打つとも蹴るともなすつて下さいまし。それがわたしのお願でございます。せめてあなたに叱つて叱つて、責めさいなんで頂ければ、この心が幾分でも霽れます。而してどうぞ早速

御離縁なすつて下さいまし。

三浦。（決然と）おひでー　おまへは何を云つてゐるのだい。おまへは俺の愛を信じないのか。俺の心がおまへにはまだ解らないのか。

ひで。（男の威嚴に打たれて顔を上げる。）

三浦。おひで。おまへは僕が先刻ある人から、おまへの姙娠五ヶ月にも係らず、知らずに捨てゝ置くのかと云はれた時、僕が何と答へたと思ふ。僕は其時卽座に、おまへが病院にゐた頃から、おまへを愛した覺えがあると答へた位だよ。たとひおまへの身の過去に暗い所があつても、僕のおまへを愛する心に變りはないんだ。僕はもとよりおまへの過去をすつかり許してゐるのだ。

ひで。（肩をふるはして泣きつゝ）濟みません。濟みません。

三浦。おひで。考へて見ると僕たちも、初めから幸福な一對ではなかつたねえ。世間の人からは嗤はれ、家の者からは反對されて、やうやう此處まで切り拔けて來ると、又こんな試錬が待つてゐたんだ。が、僕はこんな事に敗けはしないよ。もつと〳〵苦しい事でも耐へ忍ぶよ。僕らは既に萬難を排して結婚したのぢやないか。この後とても萬難を排して一緒にゐなければならないんだ。いゝかい。解つたかい。

ひで。はい。――ですけれどもわたし、……

三浦。僕のやうに遠く理想を目ざして、絕えず進まうと云ふ人の道は、どうせ酬いられない淋しい道なんだ。僕はもとからそれを覺悟してゐた。併し僕はおまへを得た時、天が僕に僕の覺悟を嘉して、おまへといふ道伴れを授けて下すつたのだと思つた。そしておまへを理想實現の象徵のやうに思つて、どんなに辛い時でも慰められて來たのだ。何に破れ、何に失敗しても僕にはおまへがある。おまへがある中は、僕の理想も破產しないと思つてゐたのだ。――おひで。おまへがさうして僕に離婚を要求するいぢらしい心根は、僕も泣きたいやうな思ひで察してゐる。併しこんな事で二人は離婚なんぞ出來やしないぞ。そんな風に考へたらおまへは僕の愛を見違へてるのだ。

ひで。それは解つて居りますけれど、……

三浦。おひで。おまへからそんな事を云ひ出さないで、どうか僕と一緒にゐてお呉れ。今

おまへに去られたら僕はどうなる。僕の生活は、僕の事業はどうなる。僕の献身の事業が、僕に最も近い、足許の家庭の破綻から初まつて、すべてが根本から覆されたらどうなる。おまへは僕の理想の柱石なんだ。中心なんだ。だからどうか居て呉れ。僕にはまだ〳〵こんな事を忍ぶ力があるんだ。まだ〳〵大きな苦しみに堪へる力があるんだ。おまへの心は解つてゐる。だからどうかゐて呉れ。ね。ね。解つたかい。

ひで。（微かに）わかりました。

三浦。ぢや決して捨鉢な心を起しちやいけないよ。いゝかい。その腹の子は飽くまで僕の子なんだからね。

ひで。ほんとに、ほんとに濟みません。

三浦。ぢや僕は行つて來るからね。涙を拭いて、安心してゐるんだよ。いゝかい。（時計を見て）あゝ遲くなつた。ぢや行つて來るよ。

ひで。では行つていらつしやいまし。

（二人は玄關の方へ出て行く。やがてひで子は獨り涙を拭き乍ら歸つて來る。脱ぎすてた衣物を疊みかけて、思ひ出したやうに嗚咽する。夕闇が室内に忍び入つて、隅々はもう物色し難いほど暗い。）

ひで。（泣き乍らかすれ〳〵に口走る）あゝは云つて下さるけれど、……此儘居ちやあどうしても濟まない。……どうしても濟まない。（と泣き崩れる。やがて決心したやうに顔を上げて）さうだ。……矢つ張りさうしよう。……此儘居ちやあどうしても濟まない。……

（幕）

第四幕

職工長國分寅治の家。

舞臺は第一幕に同じ。時は前幕より數時間後の夜。——

幕あくと寅治微醉を帶びて、例の如く凝視の姿勢を續けてゐる。其眼は相變らず「反抗」に輝いてはゐるが、其姿にはうすら淋しげな影がある。おつながそこへ訪れる。

つな。（戸を開ける）今晩は。

國分。あゝ、おつなさんか。丁度淋しがつてた所だ。まあ入つて話して行かないかい。

つな。（入り來る）まあ、今夜は珍らしくお酒を飲んでるのね。一體どうしたの。

國分。（二合入の銚子を示して）なあに僅かこれだけよ。鳥渡人眞似をして飲んでみたが、ちつとも面白くなりやしない。

つな。何かお酒でも飲まなくちやならない譯があつたの。——又おひでちやんの事でも思

ひ出したんぢやなくつて。

國分。馬鹿あ云ふない。おひでの事なんざあ、何とも思つちやあゐないよ。あいつあもう今ぢやあ、立派な社長の奥さんぢやないか。こちとらは人種が異うんだ。御立派な玉の輿にお乘んなすつたんだからな。

つな。何とも思つちやゐないつて云ひ乍ら、あんな厭味を云つてるよ。そんな廻りくどい事を云はないで、いつそ未練があるならあると、はつきり白狀してお了ひよ。其方がよつぽど胸が霽れるわ。

國分。何を云つてやがるんだ。未練なんぞあつて堪るものか。もう顏を見るのも厭だよ。

つな。顏を見るのも厭だつて、おまへさん其後あの人に會つたの。

國分。うむ。實はな。今日あいつの家へ行つたんだよ。而して鳥渡會つて來たんだよ。

つな。まあ、おまへさんが出かけて行つたの。

國分。なあに社長の所へ用が在つてね。出かけて行つてみると、これが留守なんだ。そこでふいと思ひついてね。留守を幸ひと、奥さんにお目にかゝり度いと申入れたのさ。

つな。で、おひでさんは出て來て。
國分。うむ。出て來たには出て來たが、いやはや、劍もほろゝの御挨拶さ。さすがに社長の奥さんになつて了ふと、權識が違つたものだと思つてねえ。
つな。まあそんなに高ぶつてゐるの。
國分。當人高ぶつてゐる積りぢやあるまいけれど、餘りそつけなく歸れ〳〵と吐しやがるんで、俺も少々腹が立つたから、二三言惡口を叩きつけてやつた。
つな。そしたらどうして。
國分。なあにそれだけの事だがね。——さうして歸れ〳〵つて追ひ歸し乍ら、いづれ話さなくちやならぬ事があるから、其中に行くつて御挨拶なんだ。
つな。隨分威張つたものねえ。話つて何があるんでせう。
國分。大方一生俺に來ないで呉れとでも云ふんだらう。でなきやあ昔の事を口止めでもするんだらうよ。——此の俺の口が一つ辷れやあ、大きな面をして社長の奥さんでございと云へなくなるかも知れないんだからな。思へばあの社長つて奴も馬鹿な奴よ。他人のお古を頂いて、難有がつてゐるんだからな。

つな。大さう家では強いのね。さう面と向つて云つておやりになればいゝのに。
國分。ほんとに今考へると云つてやりたいやうな氣もするが、まさか俺だつてさうは云へないからな。
つな。矢つ張り弱味があるからでせう。
國分。何の弱味が？
つな。惚れた弱味さあね。
國分。馬鹿あ云ふない。誰が。——
つな。いゝえ、きつとさうよ。さうに違ひないわ。
國分。何を云つてやがるんだ。
つな。さうだわ。さうだわ。きつとさうだわ。
國分。うるさいなあ。餘り餘計な事を云ふと追出すぞ。
つな。ぢやわたし歸るわ。だけどおまへさん嘘をついても駄目よ。ちやんと未練が顔に出

てゐるんだから。（立上る。）

國分。まだべら〳〵云つてやがるのかい。

つな。もう何にも云はずに歸つてよ。左様なら。（戸口の處で）だけど國分さん。おまへさん自暴酒だけはおよしよ。見つともないし、體にさはるからね。左様なら。（戸を急に閉めて去る。）

國分。餘計なお世話だ。馬鹿め！

（彼は又おつなの言葉に胸中の悶えを大きくして、殘つてゐた酒を續けざまに煽る。さうして又もや例の凝視の姿勢に歸る。長い間。戸の外で女の聲がする。）

ひで。（外から）御免下さい。

國分。誰れです。お入んなさい。

ひで。（戸を開けて入り來る。蒼白な顏をしてゐる）わたくしでございます。

國分。おやあなたは、……あなたでしたか。（强ひて驚きを隱して冷淡に）何か此處に御用があるんですか。

ひで。はい。今日先刻もお話し申上げた通り、少々あなたに聞いて頂かなくちやならぬ事がございまして、それでわざ〳〵參つたのです。い よ〳〵お話しなくちやならぬ時が來たのです。

國分。はゝあ、さうですか。それは又餘りに早く來たものですね。先刻はあんなにまでして追ひ歸した位だから、まだなか〳〵御光來にはなるまいと思つてゐましたよ。

ひで。私もこんなに早く上らうとは思ひませんでした。けれど、是非がない事だから仕方がありません。

國分。是非がないと仰有るからは、餘程重大な御用だとは思ひますけれど、社長の奥さんともあらう者が、今時分一人でこんな處へおいでになつては、お家に濟まなくはございませんか。幸ひ誰も見てゐるものがございませんから、今の中に、默つてお歸りなすつたら如何です。誰かに見られて知られでもすると、お家の方が不首尾になりやしませんか。

ひで。わたしもう家の事なぞは考へては居りません。たゞ是非一度あなたに聞いて頂きに

参つたのですから。

國分。一體あなたが私に用のある筈はないんですがね。

ひで。申し上げる前にお斷りして置きますが、わたしはそれをあなたにお話したからつて、別段その償ひをして頂かうとか、後始末をして下さいとか云ふのぢやございませんから、そこは御心配下さらなくても宜しうございます。たゞわたしはそれを申し上げないと、どうしても自分の心に濟みませんし、思ひ殘りになるからでございます。

國分。妙に改まつた前置なんぞして、一體それは何だと云ふのです。

ひで。(低く、併し明瞭に)わたし姙娠して了ひました。お腹にゐるのはあなたの子です。

國分。何だつて。(急に荒々しい言葉になる。)俺の、……俺の子を孕んだつて。馬鹿あ云つちやいけない。そんな話があるものか。いくら天道樣が惡戲好きだつて、そんな筈があるものか。

ひで。でも事實ですから仕方がありません。私のお腹は五ツ月です。あれから丁度五ヶ月になります。

國分。併しそれが確かかどうか解らんぢやないか。

ひで。いゝえ私が第一さう思ひますし、お醫師樣もさう仰有つたさうです。其上家の人までさう氣附いてゐます。

國分。ふうむ。眞實かい。(と考へ込んでゐたが、突然奇妙な笑聲を擧げて)はゝゝゝ、皮肉な天だなあ! 俺の子を持つて、社長の處へ嫁に行くなんて。勞働階級から資本家に持つて行くにしては、まるで結構過ぎる位結構な持參金だ。はゝゝゝ。

ひで。(顏をそむけて聞いてゐたが。)まあ、よくあなたはそんな事を云つて居られますのね。——それは成程あなたのお言葉の眞似をすれば、持つて行く時には結構な持參金でせうけれど、持つて歸る時には猶更結構な手切金でせうからね。

國分。何? それぢやおまへは離緣されて來たのだな。

ひで。(冷然と)いゝえ。

國分。ぢやあどうしたんだ。家の人は何と云ふんだ。

ひで。あの人は立派に許して下さいました。私が何もかも打開けたのに對して、一言も咎

め立なんぞせずに許して下さいました。
國分。ぢやあもう俺の事も云つたのだな。
ひで。えゝ。眞つ先きに云はなくちやならぬ事ですもの。
國分。それでも許すと云ふのか。おまへを元のまゝに妻として置くし、俺の子を自分の子
として育てると云ふのか。
ひで。えゝ、さう確かに仰有いました。
國分。それぢやおまへは此處へ何しに來たのだ。
ひで。ですから先程も申し上げた通り、只それだけの事を聞いて頂くためにです。
國分。おまへが此處へ來る事は、家へ云つて來たのか。それとも家では知らないのか。
ひで。家では知りません。默つて出て來ました。
國分。ぢやあ家へ知れたらどうするのだ。そのため折角許されたものを許されなくなつた
らどうするのだ。おまへが今時分此處へ來たと知つたら、いくらお人好しの社長でも、
二度は許さないかも知れないぢやないか。

ひで。ですからそれも先刻申し上げた通り、仕方がないと覺悟して居ります。さうなつた
ら家へ歸らないばかりです。
國分。而して此處にゐようと云ふのか。それで俺の處へ來たのだな。
ひで。いゝえ、それも先刻申し上げた通り、……
國分。（皆まで聞かずに興奮して）併し俺の處へ尻を持ち込んだつて、今更俺の知つた事ぢや
あ無いよ。先刻はおまへの家を出る時、いつでもおまへが歸つた來れあ、喜んで迎へる
やうな事を云つたが、あれあ當座の御座なりだよ。誰が一旦他人の妻になつた女を、難
有がつて頂戴するものか。俺はあの甘い社長とは違つて、おまへに惚れちやあ居ないん
だからな。今更身持ちのお世話なんざあ、眞つ平御免を蒙るよ。
ひで。だからあなたのお世話なんぞお願しません。
國分。ぢやあ何處へ行くんだ。
ひで。どこへでも參ります。
國分。どこへでもつて？

ひで。どこだかわかりません。たゞ行く處までは行くでせう。
國分。おまへどうかしてるね。
ひで。どうもしてやしません。
國分。おまへまさか死ぬ氣ぢやあるまいね。
ひで。(淋しく笑つて)わたしに死ねますかしら。
國分。そんなら何故家を默つて出たりするのだ。許して呉れたのを何故又壞さうとするのだ。おまへは第一此處へ來るのが間違つてゐる。だから早く家へ歸るがいゝ。許して呉れたものならば、平氣で許されてるがいゝぢないか。
ひで。あの人が幾ら許して下すつても、わたしの心が許して頂けません。あの人の博い愛の心につけ入つて、わたしはこの汚れた身體を許して頂くに忍びないのです。あの人はそれでなくとも、色々な苦勞が多過ぎるのですもの。わたしは其上に忍ぶことの出來ない苦しみを、持ち込む事は出來ませんわ。
國分。併し、それは當然あゝいふ種類の人間の、背負(しよ)はなくちやならない重荷なんだ。いから苦むだけ苦ませてやるがいゝ。さう云ふ事ででも苦まなければ、贅澤すぎる輩(ともがら)なんだ。いゝから歸れ歸れ。さうして幾らでも苦ませてやれ。俺には今、あれがおまへを許すと云つた苦しい心持がよく解るぞ。苦しがれ、苦しがれ。これがおまへたちの天刑だ。資本家階級に居るものゝ天罰だ、さあおまへは歸れ。眞つ直に三浦の家へ歸れ。
ひで。あなたの只今のお言葉で、あなたのお心はよく解りましたわ。あなたは御自分の主義のためには、どんな酷い事でも平氣でなさるお方なのね。私は勿論歸ります。到底あなたの處になんぞ居られませんわ。そしてお言葉通りに歸りますわ。けれどもあなたのお望み通り、あの人に苦しみを與へるために、歸るかどうかは解りません。(立上つて)では左樣なら。
國分。あゝ左樣なら——。もう之つきり會はないから、おまへもたつしやでゐるがいゝ。
ひで。難有う。あなたこそ御機嫌よう。
(ひで影のやうに出て行く。國分しばらく呆然として、閉めて去つたあとの戸口を眺めてゐる。)

國分。（一つほつと吐息をして）あゝあ、又酒が醒めちまひやがつた。（と殘つてゐた酒を煽る。）

（何となく不安な間。職工中村入り來る。）

中村。國分さん。お家かい。

國分。やあおまへさんか。まあ入らないか。

中村。（入つて來て）今あなたの處から出て行つた女の人は誰ですい？

國分。おまへ會つたのか。どつちへ行つたんだい。

中村。そこの處で會つたが、向うの踏切の方へ行きましたよ。

國分。ふうむ。少し訝しいな。

中村。どうしたんですい、一體。

國分。なに、あれあ通りすがりの女なんだがね、今道を聞いたから敎へてやつたのだが、……（獨言するやうに）それぢや暗いんで間違へたんだな。

中村。さうですかい。

國分。（凡てを拂ひのけんとする如く盃の滴を切つて）どうだ。一盃やらないか。

中村。やあ、今夜は珍らしい御馳走ですな。ぢやあ一ぺえ頂きませうかな。（盃を取る。）

國分。（注ぐ。酒僅かしか無し。）やあこいつは濟まなかつたな——ねえおい中村。濟まないが、濟まない序にもう一つ濟まないで呉れないか。

中村。どうするんですい。何を云つてるんですい。

國分。（德利を振つて見せて）どうかこいつを一と走り賴みたいんだ。少し遠いけれど端れの三河屋まで行つて、俺からだとさう云やあ、通ひで寄越して呉れるんだ。一升ばかり賴む。俺はもう一二合で澤山だから、あとはみんなおまへさんに御馳走すらあ。祝ひ酒だか自暴酒だか。弔ひ酒だか知らないが、兎に角一ぱいやらなくちやならない譯があるんだ。

中村。へゝえ。さうですかい。そんなら一つ行て來て上げやせう。

（中村德利を下げて出て行く。やゝ長き間。夜のやうやく更け行く氣配がする。暫らくして三浦淳吉、蒼ざめたる顏と血走れる眼にて、戸口の處へ急ぎ現はれる。）

三浦。失敬。（入つて來て見巡し乍ら）早速だが、此處へ僕の妻が來はしなかつたかね。

國分。あゝ、誰方かと思つたら社長さんですか。まあどうぞお上りなすつて。

三浦。いえ。さうしちや居られません。——あの、ほんとに妻が此方へは來はしませんでしたかね。

國分。(云つたものかどうかと思ひ煩ひ乍ら)奥さんがですか。さうですね。

三浦。(强く)來ませんでしたかね。

國分。いえ、えゝと、もう少し先刻、鳥渡おいでになりました。

三浦。(急き込んで)そしてどうしました。

國分。(もうすつかり決心して)何だか私の子を孕んで、あなたに濟まぬとか何とか云つてゐましたが、私は諭して歸しました。おとなしく歸つて行ききしたから、もう彼是お宅へ著いた時分と思ひます。

三浦。いえ併し、確かに宅へは戻つて來ません。眞つ直ぐ歸つたならぶつつかる筈ですが、中途でも會ひませんでした。あれはきつと何處か外にゐるのです。

國分。ではひよつとすると、——(と顏を見合せる。)

三浦。さうです。多分。さうだらうと思ひます。私もそれを恐れてゐるんです。——ではかうしちや居られません。私は一と通り探してみます。失禮します。(慌しく去らうとする。)

國分。(鳥渡考へてゐたが)三浦さん。鳥渡お待ち下さい。

三浦。(振り返つて)何ですか。

國分。私あなたに一言云ひたい事があります。かう云ふ機會を利用するのは、少しく殘酷な態度のやうに見えますが、丁度好い折だから一應お聞き取り下さい。

三浦。何ですか。早く云つて呉れ給へ。

國分。三浦さん。よくお聞き下さい。若しこゝであの闊口ひでが、悲慘な結果に陷るやうな事があつたら、それは全くあなたの責任ですよ。あなたのやくざな仁慈と、わざとらしい寛大との罪ですよ。あなたはなまなか彼女を救はうとして、却つて彼女を苦しめたのです。强ひて彼女を許さうとして、實は却つて彼女を責めてるのです。あなたはまだそれに氣が附かないのですか。こゝでもあなたの仁慈主義は、——溫情主義は破綻を起してるのです。

三浦。何ですつて。——

國分。まあお聞きなさい。ひとり此の關口ひでの場合ばかりではありません。あなたはもうとうに、吾々に對するあなたの仁惠的態度から、溫情主義から目醒めてゐなければならなかつたのです。あなたは吾々に取つて、ほんとにお情け深い工場主でした。常に吾吾に對して、溫情を以て臨んで呉れました。併しあなたのその態度には、丁度慈善を施す人のやうな、恩惠を與ふる人のやうな、喜びと誇りとが含まれゐます。工場主の仁慈を只管難有がるのは、封建時代からの遺物です。今日では恥づべき奴隷根性です。吾々覺醒した勞働者は、それを却つて侮辱に感じます。吾々は工場主と自分らとの間を、常に正當な對等關係に置きたいのです。正當に要求するものを、正當に與へて呉れゝばそれでいゝのです。餘計な「お情」や「御恩」は要らないのです。關口ひでの場合を一例に取つて見れば、彼女の治療代と扶助料とを正當に出して下されればそれでよかつたのです。小說的な結婚なんぞに依つて、「救つて」なんぞ頂かなくてもよかつたんです。どうです。お解りになりしまたか。

三浦。（默つてゐる）……。

國分。かう云ふ匆卒の場合ですから、よくお解りにならなかつたら、いづれお宅へお歸りになつてゆつくりお考へなすつて下さい。而してあなたの非をお覺りになつたら、これは甚だ差出がましい忠告ですが、僅かに態度なんぞを改めて下さるよりは、一刻も早く社長をおやめなつて、もとの東京へお歸りなさる事をお勸め致します。あなたが此儘仁慈を施せば施すだけ、職工らは益々反感を持つだらうと思ひます。もうたゞでさへあなたは甘く見られて居ります。ですから此上凌辱を受けない中に、その「理想」とやらの旗を捲いてお歸んなさい。それが何よりもあなたのお爲です。

三浦。（猶も默つてゐる。）……。

（此時突然家を搖する汽車の響がして、汽笛がけたゝましく鳴り響く。）

三浦。（ある豫感に戰るへて）おや、……（と耳を欹てる。）

國分。（同じく）何だらう、急に汽笛なんぞ鳴らしやがつて！

（不安なる沈默の中に、兩人眼と眼を見合はす。外を驅けてゆく人の足音がする。）

行人の聲。　轢死だ！　轢死だ！

近所の人。（戸口から）國分さん。又誰か鐵道往生をしたやうだぜ。（馳せ去る。）

三浦。なに、轢死？　（急いで出て行く。）

國分。（呟く）ぢややつぱり、……やつぱり、……やつて了つたのかな。（行かうか行くまいかと煩悶する體。）

（中村息せき切つて現れる。）

中村。國分さん。大變だ。あすこで社長の奥さんが死んだぜ。あのおひでさんが轢死したぜ。今踏切の傍で鐵道の人が、大變騒いでゐるから行つて見たら、おめえ、轢かれてるのはおひでちやんぢやねえか。俺あびつくりしちまつて、いきなり此處まで驅けて來たが、――おい國分さん行つて見よう。おまへに急いで知らせに來たんた。さ、早く行かう。――あ、酒は此處へ置くよ。おめえ行つて見ねえのか。（國分が默つてゐるので）ぢや俺あ一人で行くぜ。（中村不思議な面持で、併し足早に退場。）

國分。（酒を二三杯續けざまに煽つて）俺のせゐぢやないぞ。……ほんとに俺のせゐぢやないぞ。……みんなあいつ等が惡いんだ。……あいつ等が苛め殺したんた。……（と切れ〴〵に呟く。）

（三浦淳吉再び登場。彼の眼は黑くうるみを帶び、顏は嚴肅なるまでに蒼白である。）

三浦。（靜な聲音で）國分君。おひではとう〳〵死んだよ。君の言葉の通り悲慘なる最後を遂げた。而してこれは成程、僕の「やくざな溫情主義」の結果かも知れない。併し、それと同時に君の「反抗のための反抗」も、多分に責任を頒たなければならぬ事を、お互に考へようぢやないか。――兎に角僕は葬式の濟み次第、君の忠告に從つて東京へ歸る。だから最後の敗け惜しみかは知らぬが、一言君にも反省を促して置くよ。では左樣なら。僕はこれから、僕らの犧牲に供したあの可哀さうな女の、引ちぎられた死體を運ばなくちやならないから。（靜に退場。）

（國分答ふる所なし。三浦の足音とぼ〳〵と遠ざかり行く。）

（幕）

飜弄

人物

原口淳三。　鑛務所長。
同　照子。　その妻。
池田光雄。　若き醫師。
其他。召使お時。鑛務所給仕。坑夫等。

場所

東北の或る銅山。

現代

現代。或る春の頃。

（舞臺）東北のある鑛山の官舍の一室。西洋風の客間で、鑛山に相應しくない程氣のきいた裝飾が加へられてある。右の方に扉があつて玄關口へ通じ、左手の戸は主人の居間に通じてゐる。正面には大きな窓。その窓の下はすぐ崖になつてゐて、谷を隔てた鑛山の一部が見える。荒凉たる山肌には、無殘なる迄網狀の土抑へが張つてある。

室の中央に圓卓。椅子。壁によせてソオフア。書函。棚。煖爐。置時計などがある。凡て室内の裝飾は、かう云ふ鑛山生活をしてゐる上流人の常として、非常に贅澤なものを選んである。

鑛務所長原口氏の妻の照子は、やうやく二十五歳を越したか越さぬ位の美人である。彼女の美貌は室内の器具と共に、鑛烟の中でよく保ち得たと思はるゝ許りに、若くいきゝとしてゐて、その眼は常に異常なるものに對する惝恍に輝いてゐる。彼女は今窓の下なる長椅子に凭れて近着の婦人雜誌を開いてゐる。暫らく頁を飜してゐる中に、だんゝ亂暴にめくり終つて、遂には其雜誌を室の中央の圓卓目がけて放りつける。罪もない可哀さうな雜誌は空氣に逆らつて飜り乍ら、やうやく歪んだ儘其位置を卓上に見出す。

照子。（輕い欠伸を一つして）ときや！　ときー

聲に應じて召使のときが出てくる。

とき。（エプロンで濡れ手を拭き乍ら）はい。何でございます。

照子。時計が止つてるぢやないか。ほんとにしやうがないねえ。何時だか臺所のを見ておいで。

とき。今、四時打つたばかしですわ。

照子。間違ひないんだね。

とき。はい。丁度今四時を打つたんで、お釜をかけようとした所なんですもの。過ぎたところが一分か二分ですわ。私がネヂをお掛け致しませうか。

照子。いゝよ。私が捲くから、自分で時計でも捲かないと、退屈でたまりやしない。私は時々時計の針をいぢるのが面白いんで、わざと止まらして見るんだよ。

とき。まあ厭な奥様！　いくら日永ですからつて、あんまり子供らしいお悪戯ですわ。

照子。さう云へばほんとに日が永くなつたね。まだこんな所まで日がさしてゐるんだもの。

とき。ほんとに鑛山でも春が來れば、日だけは永くなるんですわね。そこゝに植ゑた霧島櫻の外には、草だつた一本青くなるでなし、花だつて一つ咲きもしないのに。……

照子。ほんとにさうだよ。でもかうして此窓から向うの山を見てゐると雪がなくなつたんで春の來たことだけは知れる。其外には春も夏も冬もないやうだね。

とき。ほんとにさうで御座いますよ。だから若い身空で鑛山やなんぞ來るもんぢやないと、つく〳〵思ふこともあるんで御座いますよ。田舍で育つた私たちでさへさうで御座いますから、少さい時から東京でばかりお育ちになつた奥様なぞは、どんなにお辛いかとお察しすることが出來るほどでございますよ。

照子。馴れて見れば淋しさはそんなでもないけれど、此頃はほんとうに退屈で仕方がないんだよ。

とき。ではお時計でもお廻し遊ばせな。ほゝゝゝ（わざとらしく追從笑をする。）

照子。（同じく空虛に笑つて）ほんとにねえ。（立上つて置時計の處へ行く。）もう五分過位にして置かうかしら。

とき。えゝ。もう其位過ぎたで御座いませう。

照子。さうね。（時計の針を廻す。時計鳴る。一點、二點、三點、四點。）

とき。（圓卓の上の婦人雜誌に目に附け、取上げて口繪を見てゐる）　まあ綺麗ですこと。

照子。（ふり返つて）何が綺麗なの。

とき。この雜誌を拜見してゐるのでございます。

照子。あゝさう。何か綺麗な繪でもあつて。

とき。上野の櫻でございませう。

照子。（もとのソオファへ戻つて）ほんとに東京ではもう花なんだねえ。あの此處の霧島櫻は

いつ咲くだらうね。

とき。早くても四月の末でございますわ。

照子。あんな淋しい花でも、櫻だと思ふと待遠だから不思議だねえ。

とき。だつてあれは櫻の部類には入りませんわ。

照子。でも櫻には違ひないよ。どうしてお前は櫻でないつて云ふの。

とき。だつて少しも櫻らしくないんで御座いますもの。

照子。いゝえ、櫻だよ。櫻に違ひないよ。（甲走つた聲で）櫻だとお云ひよ。

とき。でも奥様……

照子。いゝえ。櫻だとお云ひつたらねえ。

とき。はい。櫻でございます。

照子。（おど〳〵する召使を笑つて）それでいゝんだよ。

とき。どうぞ御免遊ばして下さいまし。私何も奥様にお逆らひする氣で申上げたのではな

いんで御座いますから。

照子。いゝんだよ。何もあやまらなくたつて。退屈だから鳥渡すねて見ただけなんだよ。

私の方こそ勘忍してお呉れ。退屈晴らしの道具になんぞ使つてほんとに濟まなかつたわ

ね。

とき。まあお人が悪い。私又お氣に障つたのかと、隨分心配しましたわ。

照子。ほゝゝゝ。こんな主人も會にしきや在るまいから運だと思つて諦めてお呉れね。——

わたしだつてこんなお惡戯でもしなければ、生きてゐられないんだからねえ。

とき。ほんとに私どもから見ますと、羨しい程お氣樂な身の上ですわ。旦那様はあゝ云ふ

お方で、私が參つてから只の一度もお怒りになつた事はなし……。

照子。あら、お前はうちの人が怒らないのを好いとお思ひなの。わたしにはそれが又つまらないのだよ。

とき。まあ、奥様だけですわ。そんな事を仰しやるのは。ほんとに奥様は尋常外れな事ばかりお好きでゐらつしやいます。

照子。さうよ。だけど誰だつて變つたものが好きに違ひないわ。それを他の人は怖ろしがつて、手に取つて見ないだけの事だわ。私は何でも非凡でさへあればすぐ嬉しがるのよ。他人の怖がるストライキだつて私は傍で見てゐると面白くて堪らないの。又いつかのやうな騒ぎがあるといゝわね。

とき。眞つ平ですわ。怖くつて外へも出られないぢやありませんか。

照子。ぢや又山崩れか地震でもあるといゝわね。

とき。また奥様は氣狂ひのやうな事ばかり仰しやいます。私共はいくら退屈したからつて、そんな事は考へやしませんわ。

照子。ぢやどんな事を考へるの。

とき。さうですねえ。——主に明日の事ですわ。明日になると違つた日がきつと來て、違つた人に會へるといふやうな事ですの。でなければ食べ物の事とか、男方の事なんぞですわ。

照子。おまへ達はほんとにいゝのねえ。自由で。——どこへ行つて、どんな人達とも仲間入りが出來るのだもの。わたし達はそこへ行くと、要らない階級なんぞを持つてゐるものだから、只漠然と敬遠されて了ふんだもの。此間も鑛務所の若い法學士の保科さんに會つて、折角若やいだ話を持ちかけると、妙に固くなつて遁げて了ふんだよ。それから今朝も崖の下で、坑夫たちに變つた坑の中の話でも聞かうと思ふと、不思議さうに私の顏を見凝めて、返事一つせずに逃げて了ふんだもの。

とき。奥様が餘り美し過ぎるせゐですわ。

照子。まあお前も中々御世辭屋ねえ。

とき。だつてほんとうで御座いますもの。誰だつて奥様の方から、言葉を掛けて下さらうなんぞと思ひ設けはしませんわ。美しくて御立派な方は、ツンと高ぶつてゐらつしやる

ものとばかり思つて居りますから。

照子。さうかねえ。だつて私はそんな立派な地位にゐるのかしら。――こんな處で女王になつてもつまりやしないわ。（ぢつと沈默する。）

玄關で鈴の音がする。

照子。おや、お歸りかしら。それともお客樣かしら。

とき。お歸りにしても少し早うございますね。（と急ぎ玄關口去る。）

やがて召使は豫期に外れた顏をして入つてくる。後から鑛務所の給仕（十四五歲）を連れてくる。少年は手に燃えるやうな緋桃の枝を持つてゐる。）

照子。（晴々しく）まあお前なの、給仕！

給仕。さうです、奧さん。今日は！

とき。給仕の癖にベルなんぞ鳴らすんですもの。

給仕。だつて何が差障がないとも限らないでせう。ねえ奧さん。

照子。だけどお前は子供だから、どん〳〵入つて來てもいゝよ。わたしはお前を侍從武官にしてあげるよ。

給仕。ぢや今度からずん〳〵入つて來ませう。だが、奧さん、今日は特別な用事で來たんですから、ベル位鳴らしたつて關はないでせう。――實は此花を持つて來たんです。これは下の町から事務所へ持つて來て呉れたのですが、きつと奧樣がお好きだらうと思つて、少しチヨロまかして來たんです。いゝ花でせう。

照子。まあ難有う。ほんとに今に十倍もお禮をするよ。

とき。チヨロまかして來たなんて、お前さん大丈夫？

給仕。なあに見つかりやしませんよ。それに他の所へ持つて行くんぢやないんだもの。

照子。さうね。わたしも折角お前が盜んで來て呉れたと思ふと、難有味が百倍するやうだわ。

給仕。あゝよかつた。一生懸命盜んで來て、おまけに叱られでもした日にや、僕の立つ瀨はありませんからね。

照子。給仕。ほんとにお前は可愛いゝ動物だね。この鑛山で生々してゐるのはお前だけだよ。

給仕。いゝえ、他の人たちは、奥さんだけだと云つて居ります。——左様なら奥さん。僕はもう行かなくちやなりません。

とき。あらもう左様ならなの。ばかに早いぢやないかね。

照子。ちよいとお待ち。おまへの洋服の後ろに、泥がついてゐて見つともないよ。さ、此處へおいで。

給仕。さうですか。泥のつく筈はないんだけれど。(召使に)ほんとについてるかい。

とき。さうだねえ。——

照子。いゝえ。まあこゝへ來て御覽！　わたしが手づから拂つて上げるからね。

給仕。どうも恐れ入りますなあ。(夫人の所へ立つ)

照子。ほんとに此子はきつと惡戯ばかりしてゐるんだよ、こんなに泥をつけて。(と云ひ乍ら後ろを向いてゐる給仕の背にそこにあつた紙片をつけてやる)　さあ、もうこれで立派な美少年だよ。ぢや左様なら。

給仕。どうも難有うございました。左様なら。(召使に)失敬。

給仕は何も知らずに紙片を負うて去る。照子はおときと共に笑ひ崩れる。

照子。いゝ氣になつて紙片を脊負つて行つたよ。

とき。わたしは又附いてもゐないのに、泥だなんぞと仰しやいますから、何かと思つてゐましたわ。

照子。それもこれも退屈凌ぎだわ。——ぢや又退屈凌ぎに、すぐ此花を活けるから、花瓶の水をとりかへて來てお呉れ。

とき。はい。かしこまりました。(卓上の花瓶を持つて去る。)

照子。(花を選りわけてゐる。鳥渡匂を嗅ぐ。その時に遠くで汽笛の鳴るのが聞える)あゝもう四時半だ。ときやが正確だなんて、十分も遲れてゐるわ。(時計の所へ行つて針を直す。)

とき。(花瓶を持つて入つてくる。夫人の時計を直してゐるのを見て)あら、違つてゐましたか。

照子。あゝ十分ばかり。——難有う。花瓶はそこへ置いてお呉れ。そして旦那様ももう直きお歸りだらうから、お前は臺所の方をしてお呉れよ。

とき。はい。(去る。)

間。夫人一人で花を活けてゐる。いきなり戸が開いて給仕が顔を出す。

給仕。奥さん。覺えてゐらつしやい。もう此次から花なんぞ持つて來て上げませんから。左様なら。（素早く彼は去つて了ふ。）

照子。（戸の所へ行つて後姿を見送り乍ら）ほゝゝゝ。よく氣が附いたわね。——左様なら花屋さん。又持つておいで！

夫人は微笑み乍ら戻つて來て、更に花を直したりしてゐる。しばらく間。玄關でベルが鳴る。夫人は急いで出て行く。つゞいて主人の原口淳三氏と一緒に入つてくる。原口は中年の立派な紳士である。

原口。今日は少し蒸し〳〵するな。

照子。さうね。だけどもう春ですもの、當り前ですわ。わたし雷でも鳴ればいゝと思つてゐるのよ。

原口。また毎もの退屈誇張病にとりつかれてゐるな。もう大夫丈だよ。俺が相手になつて甘んじて退屈凌ぎの道具になつてやるから。

照子。つまんないわ。毎も貴方が玩具では。毎も同じ事なんですもの。

原口。だつて俺に變れと云つても無理だよ。肉體だつて變るには七年かゝるつて云ふぢやないか。

照子。又そんな知れ切つた話をなさるから、だから貴方は厭よ。

原口。これはひどい見限りやうだね。——あ、さう〳〵その毎も同じで思ひ出したが、今日はね、毎もと違つた人が來るかも知れないよ。どうだ、嬉しいだらう。變つた人が來るんだぜ。

照子。あらほんとう！　嬉しいわね。いつもと違つた人つて誰でせう。だけど此處の鑛烟の中にうろついてゐる人なら誰が來たつて變りつこないわ。みんな煤けて退屈な人ばかしなんですもの。

原口。所が今日の人は違ふよ。全く珍らしい人なんだ。今日も鑛務所で皆んな寄つてたかつて珍らしがつたのだよ。何のことはない。まるで動物園へ珍獸渡來と云つた有様さ。退屈病に取つかれてゐるのは、お前ばかしぢやないと見えてね。

照子。それはさうだわ。——で、其人つて云ふのはどんな方なの。若いのですか。

原口。うむ。お前がさう焦き込んで問ふのに値する位、十分に若いよ。
照子。あらさう。それは何よりも嬉しいわね。そして美しい方なの。
原口。さあ。その問題はちと返答に窮するね。だつておまへ男同志は、女のやうに相互に他人を評價したりしないからね。
照子。だつて一目で解るぢやありませんか。そんなに評價なんてしなくたつて。
原口。さうさな。打見た所俺と同じ位の男振りかな。けれど彼奴には若さが手傳つてるから、いくらか向うが上手かも知れない。いづれその公平な批判は、おまへの眼識に任せるよ。
照子。それは良人を持つてゐる女は、默つてゐたつて比較しますわ。そしてどうかかうかして自分の良人に何か勝れた點を見出さうとするものよ。そして辛うじて滿足するのだわ。
原口。へゝえ。さうかい。——ではさう云ふ統計上、俺はいつもどの點が勝れてゐるのだい。

照子。それは貴方だつて此處らの泥鼠に比べれば、どんな所でも優つてゐますよ。
原口。ふうむ。さうかね。すると今度の御醫者さんが少し大敵だて。
照子。あら、お醫者さんなのね。其人は！
原口。しまつた。つい白狀して了つた。もう少し話を伸ばして、十分退屈凌ぎの役に立てるのだつたが——。
照子。若いお醫者さんと云ふだけでは、まだ話は澤山殘つてゐますわ。だけど私はそれだけ伺つたきりで、もう其人が目の前にゐるやうな氣がしますわ。さうして永い間待ち焦れてゐた人のやうな氣がしますわ。其人はきつと私に、面白い事を持つて訪ねて來た人に違ひないわ。
原口。はゝあ、又例に依つて空想を初めたね。退屈な時にさんざ考へて置いた空想の絲口が、やつと見つかつたと云ふ譯だね。だが彼奴お前の豫期通りにいつて呉れるといゝが、初め餘り買ひ被り過ぎると失望と一緒にお前の一番苦手な退屈が、一層ひどくやつて來るかも知れないぜ。

照子。いゝえ。大丈夫よ。今度はきつと大丈夫よ。何だかさう云ふやうな氣がするわ。私が永い間待つてゐたものが來たやうな。——さうだわ。もう來てもいゝ時分だわ。

原口。何だい。その待つてゐたと云つたのは。

照子。私のほんとうの相手よ。

原口。ふうむ。ほんとうの相手——それぢや何かい。その男と又何か一と騒ぎしようと云ふのかい。お前の火弄びもいゝが眞劍になるのは降參だぜ。

照子。まあ此人は！　まだお妬きになる力だけはおありになるのね。

原口。馬鹿を云へ。おまへに男を醜弄するだけの魅力があるのなら、俺にだつてそいつを邪魔する力位起らうと云ふものさ。

照子。ぢや起して御覽なさい。私それが見度いわ。

原口。御免だよ。いくら退屈凌ぎだからつて、火弄びは俺の得意ぢやないからな。お前も手を燒くのはよしたがいゝぜ。

照子。大丈夫よ。貴方はたゞ私たちの愛さへ信じてゐればそれでいゝんだわ。わたしの貴

方に對する愛は、どんな危險な惡戯をしたつて、少しも動搖なんぞ在りやしないわ。

原口。さうだらうかね。俺は何だか心配でならない。ほんとに大丈夫かしら。

照子。それを疑ふ貴方こそ私に氣を揉ませるのだわ。いゝから信じてゐて下さいよ。何なら證據を見せてあげるわ。

原口。どんな證據を？

照子。（無言にて急に良人の頸にすがり、激しく二三度キスする。）

原口。もういゝよ、もういゝよ。もう解つた。

照子。お解りになつて？

原口。お前は時々こんな芝居氣を出すんで、俺はひどく吃驚させられるよ。

照子。だつて貴方が信じないんですもの。

原口。もう澤山だ。よく解つたから安心をおし。

照子。ぢやもうすつかり其のお醫師さんの話をして下すつていゝでせう。

原口。餘り前置が長過ぎた。こんな事になるのなら、さつさと彼奴の素性だけ述べるんだ

つた。

照子。いゝぢやないの。早く仰しやいよ。

原口。其醫師と云ふのは、此間死んだ病院の齋藤君の後釜なんだ。昨日やつと鑛山へ來たんだが、名は池田光雄つて云ふんだ。

照子。何だか聞いたやうな名前ね。

原口。よく醫學士にありさうな名だからな。

照子。ぢや其方は醫學士なのね。

原口。近頃大學を出た許りの、まだ手術刀を正式に握れさうもないやうな坊ちやんさ。何でも大學病院の助手になつてゐたのだが、急に此處から口がかゝると是が非にも來たくなつたんだとさ。若いに似合はず恐ろしい秀才で、あの立木博士が手離すのさへ惜しんだと云ふのだが、奴さん急に東京が厭になるかどうかして、無理矢理に鑛山へ來たんだと云ふ話だよ。鑛山に取つちや此上もない儲け物さ。

照子。大切にして上げるといゝわね。きつと其人は何かで失望したのだわ。そして東京を

逃げて來たのだわ。

原口。そうら又例の空想だ。もうさうなつて來ては、實物の提供を待つしかなくなる。

照子。一體その方はいついらつしやる約束なの。

原口。午後五時に晩餐を共にしたいと云つたんだが——

照子。まあ、なぜ早くそれを仰しやらないの、まだときに何とも云つてないぢやありませんか。

原口。おまへを面白がらせようと思つて、肝腎な所を忘れたのだ。だが今から云ひつけたつて間には合ふだらう。どうせ食事なんてものは長い間待たせるのが通則だからな。

照子。ぢや早速云ひつけますわ。

原口。俺は其間鳥渡書齋で書類を調べて了ふから、お客が來たら、すぐ呼んでお呉れ。（居間の方へ去る。）

照子。さうですか。（と戸の所まで送つて行きそれから卓上のベルを鳴らす。）ときや、ときゝ

ぢ。（急いで出てくる）はい。もうすぐで御座います。さきほど餘りお話を伺ひ過ぎたもの

ですから、つい遲くなつて相濟みません。

照子。いゝえ、さうぢやないのよ。あの今夜はね、一人お客様があるのだから、少し御馳走を拵へて貰ひ度いのだよ。あの毎もの通りの洋食か何かを、特別に上手に拵へてお呉れよ。わたしの大切なお客さまなのだからね。

とき。おやまあ左様でございますか。では早速さう致しませう。

照子。五時においでなさるさうですから、ほんとに急いでお呉れ。

とき。はい、かしこまりました。(去る。)

召使が去ると暫らくの間、照子は椅子に倚つて只呆然と何事かを空想してゐる。やがて氣がついて先づ卓布を引出しから取出し、それを圓卓に被ぶせる。そして其中央に花瓶を据ゑて、花を少しこぼす、それから椅子などを程よく並べる。又それらの動作の間に、ふと思ひ出したやうに壁にかけた鏡の前に立つて髮なぞを直したりする。

これらの事が終ると、又椅子にうつとり坐る。ふと思ひ出したやうに高聲で歌を唱ひ出す。少し苦しいやうなソプラノが室内を滿たすと、夕暮がだん〳〵室内を占領して來て、ぼつと夢のやうに電燈がつく。窓外はもう著く暮れてゐる。照子はやがて、「駄目だわ。もう聲も出やしない！」と獨語して唱ひやめる。暫らくして玄關の鈴が激しく鳴る。照子は驚いて立上り、鳥渡身づくろしてひ出てゆく。

それから「お待ち申して居りました。どうぞこちらへ」と云ふやうな應對の言葉が聞えて、やがて彼女は池田光雄を導いてくる。

照子。さあ。どうぞこちらへ。どうぞお掛けなすつて。

池田。(彼は美しい沈んだ若者で、しつくり身に會つた洋服を著てゐる。)はあ、難有うございます。

照子。(居間の方に向つて)貴方、貴方！　お客様がいらつしやいましたよ。

原口。さうか。(出てくる)やあ、よくいらつしやいました。待つて居りましたよ。

池田。どうも失禮しました。

照子。(晴々しく)ほんとによくいらしつて下さいました。

原口。これは君、僕の妻の照子です。

池田。初めまして。どうぞ宜しく。私は今度此方へ參りました、……

照子。いえ、お名前も何もかもすつかり存じて居りますわ。池田光雄さんと仰しやるのでせう。いゝお名前ですわね。ほんとに貴方にしつくり合つたお名前ですわ。それから貴方は齋藤さんのかはりに、此鑛山へいらしつたのね。昨日お著きになつた許りでせう。鑛

烟にお驚きなすつて？

池田。（少し面喰つて）え〻少し。……

照子。（かまはず、嬉しくて堪らぬと云ふ風に云ひ續ける。）あなたは醫學士ですつてね。去年大學を出た許りのお坊ちやんなんでせう。而して今迄助手をなすつていらつしやつたのね。大變秀才で、立木博士が惜しがつたのですつてね。だのにそれを振り切つて、わざ〳〵此處へいらしつたのね。そのお蔭でかうして貴方のやうな方と、この灰色の鑛山でお目にかゝれるのは、私どもの此上ない幸福ですわ。

原口。（初めは呆氣に取られてゐたが遂にたまらなくなり）照子。お前何だつてさう何もかも一度に云ふんだい。御挨拶も濟むか濟まぬ中から。

池田。（やつと口がきけるやうになつて）どうも奥さん、ほんとによくお存知なすつて下さいました。

照子。（良人に）いゝ事よ。私今日はほんとに好い氣持なんですもの。少し位お喋舌したつていゝでせう。（池田に）ねえ貴方。貴方だつてきつと許して下さるわねえ。

池田。えゝ宜しうございますとも、奥さん。

原口。君これで僕の妻は、氣狂ひぢやないんですよ。今日は珍らしく君のやうな人が來て呉れたので、少し上氣してゐるんですが……。

照子。貴方も餘計な事を仰しやる必要がありませんわ。だけど私も少し喋舌り過ぎたでせうか。（池田に甘えるやうに）ねえ、惡かつたら御免なさい。

池田。いゝえ奥さん。私も一體は快活なのが好きなのです。もとは是でも、中々明るい快活な男だつたんですが、ついある事から悲しみを習ひ覺えて、その快活さを失つたんです。だから今ぢやせめて快活な人に接するのが愉快なのです。私は奥さんのやうな方を傍から見てゐると、昔の快活さを取り返すやうな氣さへするんですよ。

照子。まあ、さうですか。大抵の人は若い中に、よく快活な日を葬つて了ふものですね。私あなたのその理由が大概解りますわ。

原口。又お前何か失禮なことを云ひやしまいね。

照子。大丈夫よ。（池田に）けれどもそれはもつと後に申しませうね。お互にもつとお馴染

になつてから。

池田。（だん〳〵照子の魅力に捉へられて）私もその中に是非聞いて頂きます。訴へるに訴へる人もないんですから。

照子。私でよければいつでも聞いて上げますわ。貴方のその話つて云ふのは、きつと御自分に取つては、なにか悲しい痛手なんでせう。人に觸られると痛む古傷なんでせう。

池田。（淋しく笑つて）まあそんなものかも知れませんね。

原口。（傍から取りなすやうに）まあ君、照子は毎日々々退屈し切つて、いつも君のやうな人物を空想に描いてゐたんですよ。だからどうかそのお積りで、度々話しに來て下さい。

照子。ほんとに私お待ちして居りますわ。

池田。難有うございます。奥さん。——全く私は豫期しませんでした。かう云ふ荒れ果てた山の中に、かう云ふ暖い室が私を待つてゐようとは。——ほんとに毎日でも上るかも知れません。

原口。ほんとにさうなすつて下さい。そして退屈晴しの道具になつて下されば、第一私が

助かります。

照子。わたし何も此方をそんな道具にしたくないわ。退屈ばらしの道具と云ふのは、貴方ひとりで澤山よ。この方にはもつともつとお友人になつて頂くわ。

原口。さうか。そんなら尚いゝさ。

間。玄關のベルが又鳴る。

原口。誰だらう。

照子。他の人なら歸して下さいよ。私今日は此人とだけお話したいんですから。

池田。どうか御用なら私にお關ひなく。

照子。いゝえ、いゝのよ、いゝのよ、貴方は御遠慮なさらなくたつて。

召使出てくる。

とき。鑛務所の小使が參りまして、鳥渡この手紙を御覽下さるようにと申して居ります。

原口。うむ（手紙を受取つて讀む）ふむさうか。今すぐ行くと云つて呉れ。

とき。はい。（去る。）

照子。何か御用なの。

原口。又少し事件が起きたんだ。厄介だが鳥渡行つて見て來る。甚だ池田君には失禮だが、暫くお前一人でお相手をしてゐて吳れ。池田君。鳥渡失禮しますよ。時々此處ではかう云ふ事があつてね。君もその中には、思ひがけない時に負傷者を擔ぎ込まれたりしますよ。ぢや失禮。(立上る。)

照子。あなたすぐいらつしやるの。御飯は?

原口。いくら長くても一時間とはかゝるまいから、歸つてからするとしよう。だが御馳走を二人でみんな食べて了つちやいけないよ。

照子。まさかねえ。(と池田を顧みる。)

池田。私どもはお歸りまで頂かずに待つてゐませう。

原口。そんな事はしないで吳れ給へ。却つて僕が迷惑しますから。

照子。大丈夫よ。私がついてゐますから、遠慮なんかさせやしませんわ。

原口。ぢや宜しく賴むよ。(池田に)失禮します。

池田。どうぞ、おかまひなく。

原口會釋して出て行く。照子送つて出る。やがて「いつていらつしやい」といふ言葉が聞えて、すぐ又照子は歸つて來る。二人は初めてさし向ひになつたので、暫らく默つて見合つてゐる。

照子。さあ、これですつかり二人つきりになつたわ。

池田。(それには答へず)かう云ふ事件は度々あるのですか。

照子。えゝ、始終なの。だからもう私さへ馴れつこになつてるのよ。うちの人は又あんなでも、どこか長官氣質と云ふやうなものが在つて、かういふ事には恐ろしい几帳面なのよ。いつかなんぞ箸を取り上げた所へ迎へに來たので、箸を持つたまゝ出掛けた事がある位ですの。

池田。全く鑛山の務めも容易ぢやありませんね。私なぞはもう覺悟の上で來たんですけれど、それでも昨日あの粗末な電車に乘つて來乍ら、木の幹だけ白く枯れ立つた近所の山や、黃色い烟を吐く製錬所の烟突なぞを見た時には、つく〴〵飛んだ所へ來たと思ひました。而して見る人も見る人も、仄暗い鑛烟に荒んだ顏をしてゐるんでせう。私は貴方がたにお目にかゝつて、やつと生返つた氣が致しました。

照子。私だつてさうよ。幾年來、初めて人らしい貴方にお目にかゝつたのですよ。だから
ほんとに嬉しいわ——今日は是非ゆつくりして行つて下さい。良人がゐなくつてもいゝ
でせう。ゐない方が却つて私たちにはいゝわね。靜かにほんとうのお話が出來て。
池田。けれども御主人が留守だと云ふのに、初對面早々から悠然と構へこんで、あとで圖
圖しい奴だとお思ひになりはしないでせうか。
照子。そんな事はないわ。もしそんな事があつても、私がすつかり辯解して上げるから大
丈夫よ。だからほんとにゆつくり遊んでゐらつしやい。私命令してよ。よくつて。
池田。では御言葉に從つてさうしませう。實は私も願ふ所なのですから。
照子。難有うよ。——でも是から本當の話をしませうね。けれど私先刻から餘りはしやぎ
過ぎたので喉が乾いたわ。あなたは？
池田。いゝえ、私は別に。——
照子。あなたはまだ御遠慮なさるのね。
池田。いゝえ、ほんとに何でもないのですよ。

照子。けれども私の喉が乾いたら、貴方も乾いたと云つて下さらなくちやいけませんわ。
ね、渴いて下さいよ。渴いたと云つて下さいよ。
池田。奥さん、貴方は實に不思議な方ですね。貴方はその強い力で、私に命令なさらうと
云ふんですね。
照子。だからお云ひなさいな。ね。
池田。仕方がありませんなあ。（わざとらしく）えゝ、渴きましたとも。
照子。それでいゝわ。ぢや今私が女中を呼びますから、貴方私の葡萄酒を持つて來るよう
に云ひつけて下さいな。
池田。だつて奥さん。——
照子。いえ、その位の事私のためにして下すつてもようございますよ。その代り貴方のため
には又どんな事でもして上げますからね。よくつて。（卓上のベルを鳴らす。）
池田。困りますなあ。
照子。ちつも困りやしなくつてよ。

とき。（出てくる）何の御用でございますか。

照子。（答へず。池田に魅力ある眼配せをする。）

池田。（思ひ切って）あの、奥さんに葡萄酒を持つて來て上げて下さい。

とき。はい。（と幾らか妙な面持で引込む。）

池田。奥さん。貴方は殘酷ですね。なぜ僕はかう女の人から殘酷な取扱ひを受けなければならないのでせう。

照子。あら、貴方は誰か他の方にもそんな經驗がお在りなのね。

池田。えゝ、やつと其手を遁れて此處へ來た許りなんです。

照子。それが先刻の貴方に手傷を負はせた方ね。一體どこのお方。何をしてゐらつしやるの。名は何て仰有るの。

池田。それを云へと云ふのは猶殘酷です。

照子。いゝわ。だん〳〵と伺ふから。

女中葡萄酒とグラスを盆に載せて持つてくる。そして照子の顏色を伺ひ、首肯くのを見て直ちに退場する。

照子。ともかくもお一ついかゞ。（酒をつぐ。）

池田。難有うございます。（飲む。）

照子。も一つぐつと飲んで御覽なさい。

池田。（默つてぐつと飲む。照子又注ぐ。）

照子。さあもう一度、私たち二人を此處で會はして下すつた神さまのために、二人で祝盃を擧げませうよ。

池田。えゝ喜んでー　（二人は杯を會はす。）

照子。さあ是からは私が訊ねる通りに、貴方もお話をしなければいけませんよ。お話して下さるでせうね。

池田。（少し興奮して）えゝ。何でもお訊ね下さい。

照子。ぢや聞きますよ。先づ身元から調べるのが當り前だわね。

池田。えゝどうぞ。

照子。どこでお生れなすつて。
池田。東京で生れました。
照子。そんなお答なら聞かぬ先から解つてゐますわ。もつと詳しく云はなくちやあ。……
池田。それでは本郷西片町十番地ロの十六號で生れました。
照子。あら、貴方も西片町十番地なの。ぢや勿論あそこにある榎の木を御存じですわね。
池田。え、勿論ですとも。あの廣場が幼い時の遊び場所でした。朝は牛乳車が通る頃から、晩は夕日があの梢を眞紅に染める頃まで、よく遊び呆けたものです。私共の少年時代の心に、物語めいた慕しい陰影を投げたのはあの暗い榎の木です。
照子。(自分も追憶に耽るやうに)ほんとにさうでしたわね。——そして貴方は今お幾つ。
池田。二十九です。
照子。さうして西片町にはいつ頃までゐらしたの。
池田。七つの秋までゐました。——それから芝の白金へ移つたんですが。——
照子。え、と、——鳥渡待つて下さい。さうすると貴方が七つの時私が五つの筈だから、

私の方で覺えてゐる譯はないわ。——貴方はもしかあの廣つ場から空橋へ出る道の、左り側の三軒目に三宅つて家の在つたことは御存じないでせうか。
池田。さあ、聞いたやうな名ですが、瞭きり思ひ出せませんね。——左側の三軒目と。——あの邊に何だか猛い犬のゐる家が在つたのは覺えてゐますが、あそこではないでせうね。
照子。きつとそれがさうですよ。父が犬好きであの頃珍らしいポインタアを飼つてゐましたから。けれども貴方の少年時代の記憶は、お惡かつたと云はなくちやなりませんよ。あなたはその家に可愛らしいお嬢さんのゐたのをお忘れなんですものね。
池田。可愛らしいお嬢さん。——へ、え。ではそれが奥さんだつたのですね。さうですか。さうだとすると成程私の少年時代の記憶を呪はなくちやなりません。私は餘つ程下賤な兒だつたのでせう。可愛らしい人を無視して、犬の事を覺えてゐるなんて。
照子。でもよくポチの事を覺えてゐて下すつたわね。
池田。よく吠えつかれましたからねえ。
照子。それはさうと私たちは昔、一緒に遊んだことはなかつたでせうか。わたし何だか一

度位は在つたやうに思はれますわ。

池田。さうですねえ。在つてもいゝ筈ですねえ。だがそれがなくても、かうして二人が同じ町内で育つたと云ふのは全く奇妙な縁ですねえ。

照子。ほんとに何かの因縁かも知れませんわ。——さあ貴方もう一つ如何。私たちのポチのために、もう一度祝杯を擧げて下さらなくつて。

池田。えゝ喜んで擧げませう。(二人は酒を飲む。)

照子。(池田の醉つて來たの見て)さあ、かうなつたら今度は貴方をいぢめたあの女の人のお話を、すつかり打明けてお終ひなさいよ。嘘を云はないで眞直に仰しやい。

池田。奥さん、それを云へと云ふのは餘りに殘酷です。

照子。いゝえ、かうなつては聞かせない方がよほど殘酷ですよ。

池田。さう迄仰しやるなら云ひませう。實はなんでもないんです。奥さんなぞがお聽きになつたら、ほんの笑草にしきやならない事なんです。

照子。笑ひなんぞしやしませんわ。だからお話しなさいよ——その女の人は何かなさる方

なの。

池田。或る聲樂家(ヴォカリスト)なんです。私が大學にゐた時分から、妹のお友達なんで知り合つたのです。少しは演奏會へなぞも出ましたから、名位は或ひは御存知かも知れません。宮下秋子つて云ふんです。(夫人うなづく。)もう一杯頂いてもいゝでせうか。

照子。ようございますとも。——宮下さんなら私も知つて居りますわ。たしか音樂學校で二級下でしたから。ほんとにお美しい方でしたわね。——それから。

池田。(ぐつと一杯飲み干して興奮し乍ら續ける。)つまり手早く云へばその女(ひと)に失戀したのです。どくあり來りの失戀でした。あの月の明るい晩、帝國ホテルで音樂會の在つた歸りに、私はその人とあの濠端を歩き乍ら、たうとう胸の思ひを打明けたのです。殆んど泣かんばかりに打明けたのです。けれども女は冷然と私を見て、丁度私がさう云ひ出すのを豫期して、前から答を作つて置いたかのやうに靜かに答へました。貴方のお志は嬉しうございますが、私には藝術と云ふ良人が御座いますから、どうか斷念して呉れと矜らしく云ふのです。で、私は決してその人の藝術を毀すやうな、そんな無智な男でないつて

再三云つたのですが、女はどこ迄も獨身で勉強したいから、さう誘惑して呉れるなと云ふのです。私はそれでもその女から拒けられたのだとは思ひませんでした。さうして藝術を良人とすると云ふ其人の健氣さに、猶多くの尊敬を拂つたほど馬鹿だつたのです。

照子。それで宮下さんはたうとうお終ひまで藝術を友としましたか。

池田。御推測の通りある男と結婚しました。恐らくは其男が藝術の化身だつたのでせう。ある金持の息子でしたがね。私は全く彼女に欺かれて、その土壇場まで自由に翻弄されてゐたのです。そして彼女に背かれた折には殆んど無氣力にさへなつてゐました。私は凡て堪へられなくなつたのです。そして急に隱遁すると云ふやうな事を考へたのです。そこへ丁度此の鑛山から口がかゝつたものですから、皆の引止めるにも係らず、一も二もなく來る積りになつたのです。荒み果てた鑛山の中へ、棄てられた身を葬りに來たのです。(自ら感激して涙を落す。)

照子。まあ、お可哀さうにねえ。そんなに絶望的におなんなすつて。私が慰めて上げられるものなら、ほんとに心から慰めて上げるわ。さあ此處へいらつしやい。涙をためたりなすつて。さあ私が拭いて上げますよ。ほんとに貴方は可愛いゝ坊ちやんね。これからは私がその方の代りに、可愛がつて上げますからもう泣くのはおよしなさい。(と近寄つて肩に手を置き乍ら)ね、ね。

池田。難有う、奥さん。難有う。そのお言葉は忘れません。

照子。ほんとですよ。ほんとですよ。

池田。奥さん、御免なさい。(と急に照子の胸に凭れて泣き伏す。)

照子。あなたに御酒が惡かつたわね。そんなに興奮なすつて。だけどたうとう私の思ふ通りになつたのね。

照子は自分の膝下に跪いてゐる池田の顏を微笑を以て眺めてゐる。

突然玄關のベルが鳴る。

照子はきつと吾に返へる。而してその顏には色々な複雜した決意があり〳〵と見える。

照子。あ、きつと良人(うち)よ。(平然として)だけどかまはないわ。此儘かうしてゐらつしやいよ。

池田。えつ。かうしてゐるのですつて。

照子。えゝ。いゝことよ。見せてやつた方が。

池田。だつてこんな事をしてゐちやあ……

照子。いゝえ、いゝのよ。いゝのよ。（と逃げんとする池田を猶も抑へてゐる。）

戸開き原口現はる。此の狼狽した二人の様子を見て、凝血したやうに戸口に立つ。而して湧き上る不快を鎭めんと努めるやうに強ひて冷靜に云ひかける。

原口。今歸つて來たよ。何だか惡い時に戻つたやうだね。

照子。（急に池田を突き退けて良人の手に縋り乍ら）いゝえ、いゝ時に歸つて來て下すつたのよ。わたし待つてゐたのよ。貴方が早く歸つて下さらないと。私どうなるか解らなかつたわ。

原口。一體どうしたんだい。そんなに激して。何をしてゐたんだい。

照子。わたしが惡いのぢやないわ。拒むことが出來なかつただけですもの。——私は貴方が行つて了つてから、いつもの通り退屈晴らしに、此人にからかつてゐたのよ。それを此人はすつかり間に受けて、私が西片町で生れたつて嘘まですつかり信用して了ふんですもの。そして私は幾度かもう冗談に紛らして、バアと云つて了ひ度かつたのですけれ

ど、此人がすつかり熱して來て、たうとう何も云へない中に、興奮して私の膝に縋りついたり接吻したりしようと迄なさるのですもの。ほんとに貴方はお坊ちやんねえ。

原口。何んだ！　そんなことまでしたと云ふのか。それは君本當かね。

池田。（もう萬事を了解したやうに悄然として。）えゝ事實でした。

原口。さうか。では今僕が入つて來た時ちらと見た、君が妻の膝に縋りついてゐたのは、僕の見違ひではなかつたのだね。

池田。さうです。私は一圖に思ひがけない幸福と、この飲みなれない酒に醉つたのです。

照子。あなたはまだ卑怯なのね。なぜ眞面に私が美しいからと云はないの。

池田。（自棄の氣味で）えゝ、無論奥さんの美しさが私の此の行爲の主因たるには違ひありません。私は今でも奥さんの前に跪けと云はれゝば跪きます。どうな翻弄でも甘んじて受けます。かうまでも申上げた上は、改めて原口さんの裁斷を仰がなくてはなりません。貴方の御要求を承りませう。

原口。兎に角、私は此家の主人として、君に一應此家を去つて頂きませう。

池田。それは私も考へてゐた所でした。では左様なら。奥さん、御機嫌よう。
照子。左様なら、貴方何だか淋しさうね。わたしの事をそんなに氣になすつたの。
池田。えゝ隨分驚きました。私の心臓は非常に弱いものですからね。左様なら、ひよつとするともう永久にお目にかゝれないかも知れません。が、時々は僕のやうな可哀さうな男の事を思ひ出して下さい。(去る。)
照子。左様なら。(池田の言葉に引入れられて、力なく繰り返す。)
而して戸の所に立つたまゝ、猶も後姿を見送つて呆然としてゐる。
原口。(食卓の所で)おい、どうしたんだ。
照子。え、何でもないの。だけど私何だか妙な氣がしたわ。あそこの玄關から暗の中へ、あの人の姿が淋しさうに消えて行つて了つたのですもの。あの人は何だか影のやうな人ですねえ。あの人はほんとの人だつたのでせうか。
原口。何だい。おまへ、つまらない事を云つてるぢやないか。まあそんな事を考へずに此方へ來たらどうだ。一體おまへ御飯は濟んだのかい。

照子。(猶もぼんやりして)いゝえ。
原口。さうか。ぢや少しあの男には氣の毒だつたな。飯だけも食はしてやればよかつた。——おい。又呆やり立つてるね。どうしたんだい。あんな男の事を何も考へる必要はないぢやないか。
照子。何だか今になつて、惡い事をしたやうな氣がしてならないの。
原口。そんな事があるものか。だからまあ此處へ來てお坐りよ。(食卓へ連れてくる。)
照子。あゝ貴方がゐて下すつたわね。——先刻は何御用でしたの。
原口。鳥渡索が切れて、工夫が又三人ほど殺られたよ。併しそんな事は考へんでもいゝさ。僕らはかうして穩に食事をしてゐられるのだから。そんな事より早く食事を云ひつけて貰ひ度いね。
照子。あゝさう〳〵、考へたつて無駄だわね。それよりもほんとに御飯にしませう。(鈴を鳴らす。)
召使出てくる。

照子。御飯をすぐね。

女中。あら、お客様はお歸りでございますか。お二人きりで宜しいのでございますか。

照子。あ、さう〳〵。二人きりでいゝんだよ。（女中去る。）

原口。おまへまだ呆やりしてゐるね。

照子。いゝえ、何でもないのよ。

間。女中再び出て來て食品を並べる。

原口。あゝすつかり腹が空いて了つた。

原口は常のやうに食を貪る。夫人沈思してゐる。

原口。ほんとにお前どうしたんだい。ちつとも食べないぢやないか。

照子。えゝ、なんだか食べたくないの。さつきの御酒のせゐですわ。

暫らく沈默。突然玄關の鈴激しく鳴る。

照子。（驚いて）あゝきつとあの人よ。

原口。馬鹿な！　そんな事があるものか。

一人の坑夫戸を開けて入り來る

坑夫。旦那、大變です。

原口。何だ。どうしたんだ。

坑夫。そこの前の崖へ誰れかゞ飛び込んだんです。

原口。何？　誰かゞ飛び込んだ！

坑夫。さつき私が此家の前を通りかゝると、此處から出て行つた人がありましたが、何氣なく其人の後をついて歩いて行くと、いきなりあの崖の上から飛び下りたんだす。

照子。まあ、矢つ張りあの人だつた。

原口。而してどうなつた？

坑夫。生憎今夜は風の加減で、鑛烟が谷一ぱい罩めて居りますんで、どうなつたか見えませんでした。私が驚いて行つて見た時は、もう黑い影が鑛烟の中へ消えて行つて了つてました。

照子。あゝ。（と失神しさうになる。）

原口。（妻を支へて）どうした。（坑夫に）おまへはすぐ庶務へ行つて、人を出して死骸を捜索させろ。

坑夫。はあ、承知しました。（去る。）

原口。これ照子。しつかりしろ。何でもない。決してお前のせゐぢやないから。心配するな。さあこれを少し飲んで、氣を落ちつけるがいゝ。（葡萄酒を飲ます。）

照子。（一口飲んで）もう何でもありません。あまりだしぬけなんですもの。しばらく私をかうして休まして下さいね。（と照子は食卓の上に首を伏せてゐる。）

原口。大丈夫かい。ほんとに心配しなくつていゝよ。

原口は妻から手を離して、席につき、常の如く食事を續ける。しばらく沈默。

照子。（突然蒼白な顏を上げて）あ、呼んでゐる！（立上つて）あの人が呼んでゐる！

原口。（驚いて立上り）何だい。誰も呼んでなんぞゐないぢやないか。

照子。どうしても行かなくちやならない。どうしても行かなくちやならない。（急に食卓を離れて原口が呆氣に取られてゐる間に、ふら〳〵と戸口から出て行く。）

原口。（我に返つて呼びとめる）照子。どこへ行くのだ。おい照子。（戸口へ追つてゆく。）おい、どこへ行くんだ。

照子。（聲のみ聞ゆ。）あの人の所へ。あの谷の中へ！

原口。何だと。だから惡戯が過ぎたと云ふんだ。（急いで跡を追ふ。）（幕）

大正九年二月二日印刷
大正九年二月八日發行
（定價金六拾五錢）

著作者　久米正雄

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番　八九九番）

（振替東京）一七四二番

◀三浦製絲場主◀

印刷所　東京市神田區宮本町五番地　電話下谷（四〇六七番）　新潮社印刷部
印刷者　高橋治一

□傑作選集□

人間集

小山内薫
長田秀雄
吉井勇 合著
里見弴
田中純
久保田万太郎
久米正雄

雑誌『人間』によれる上掲七名家の傑作選集也。一人一篇又は二篇、小説あり、脚本あり。何れも其の作中に在りて最も傑出し世評亦これに副へるものを選す。諸家何れも新文壇の中堅をなすの人。一人一作、尚ほ尊ぶべし。況んや七家を列ねて、各々其の傑作を網羅す。謂ゆる金剛石の徑寸なるに比す可きもの。最も異色あり光彩ある一大選集也。

有島生馬氏装
定價壹圓五拾錢送料八錢

中戸川吉二氏著 ——最新刊——

長篇小説

反射する心

一青年と一藝妓との戀愛事件を中心となし、作者得意の心理解剖を恐にす。敏感、胡蝶の鬚の如く、尖鋭、蓄音機の針の如き作者の神經と情緒とは、複雜なる戀愛心理の機微を描いて、一線を剩さず一點を過たず、まことに新しき心理小説、新しき戀愛小説として、現文壇に獨特の地位を占むる作品と云ふを得可し。

特製美本
定價壹圓五拾錢
郵送料 拾貳錢

佐藤春夫氏著 ——著者裝幀極美本——

■改作

田園の憂鬱

『田園の憂鬱』或は『病める薔薇』は、佐藤春夫氏の出世作にして亦その代表作と目す可きもの也。村居一年、靜かに田園の自然に親みて、鋭敏なる近代人的神經、豐富なる天才的情感、而して纖細巧緻を極めたる文章、具さに其の觀察し、冥想し、感得せる所を描けるものにして、涌篇珠玉の如き文字を以て成れる長篇散文詩。田山花袋氏が、初めて見たる新人の筆と激賞し、文壇擧つて眼を瞬れる驚異的の作品也。一たび書册となりて世に出でしが、作者はその慊らざる點あまりに多しとなし、更に大訂正大增補を加へ、全然面目を一變して公にせられたり。

總洋布背皮金模様
定價壹圓貳拾錢
郵送料 八錢

久米正雄氏著

小説集

學生時代

本書は坪内博士の『書生氣質』に對比すべき大正の『書生氣質』也。收むる所『受驗生の手記』『艶書』『密告者』『鐵拳制裁』等十數篇、主として作者が高等學校時代に遭逢せる幾情景を描けるものにして、作者の快濶なる氣稟と爽快なる筆致とを遺憾なく示せる其傑作選集とも稱す可く、東京の學生々活に愛着と憧憬とを有する人々は感興殊に深からん。

▼定價壹圓四拾錢
▼郵送料拾錢

室生犀星氏著 ═ 恩地孝氏裝

■自傳小說

性に眼覺める頃

特製大版極美本
定價壹圓六十錢
郵送料十二錢

詩人犀星氏、今や作家として重きをなすに至れるもの、「性に眼覺める頃」の一卷を以て也。此篇、作者が生ひたちの記にして、春の若草の如き柔かき感情と、磨ける玉の如き輝かしき叡智とが相待つてなせる高貴の藝術品也。世の常の小說の如く殊に奇巧を弄せず、飽く迄も純粹素樸の態度を以て、一つの靈と一つの肉體との育ち行き眼覺めゆく迹を描く。詩味、情味、宗教味、共に漲り溢れて、近來稀に見るの佳篇をなせり。

北原白秋氏著

長篇散文詩

雀の生活

著者挿畫十葉

價壹圓五十錢 送料八錢

昔アッシジの聖者は雀に道を說けりといふ。我が北原白秋氏玆に雀の生活を描いて、つぶさに人間の悲願を寄す。銳敏なる感覺と豐富なる聯想とは、その表情态態の微をつくすと共に、これを中心とする幾多の情景を展開して層々盡くる所を知らず。而も全篇を裏附くるに、大自然に對する禮讚愛慕の至情を以てし、この小動物の世界の到るところに神の意を見たり。長篇散文詩として、作者空前の力作たり、又文壇はじめて見るの新體たり。玲瓏の姿、縹渺のひびき、詩人白秋の全面目を悉くせる稀有の雄篇也。

永井荷風氏序　谷崎潤一郎氏著

近代情痴集

▼大版特製挿畫十五頁
▼定價 金壹圓六拾錢
▼郵送料拾貳錢

『近代情痴集』と云ふ、題目既に尋常にあらず、內容の常套を絕せるものたるは、何人も推想し得ん。肉に眼覺めたる少年が、一妖婦の美の魅惑に逢うて、たとへば牡丹の蕊に溺るゝ蜂の如く、喜んでその毒手に、陶醉の死を死ぬる『戀を知る頃』。豐麗の美女に好色の老爺を配してマソヒズムの極致を表はせる『富美子の足』を始めとして、世の常ならぬ戀と罪とを描ける諸名篇を收め、更に附するに『異國綺談』を以てし、怪奇なる幻想を淸新なる異國情調に糾へる『西湖の月』以下三傑作を蒐む。裝幀は明治初年の出版物に擬し、特異の美觀をなせるの點、また出版界の一驚異たらむ。

長篇小說

谷崎精二氏著

結婚期

價壹圓卅錢
郵送料八錢

堅實にして情趣に富める作風を以て知らるゝ谷崎精二氏が、其蘊蓄を傾けたる長篇小說也。不慮に死せる一青年詩人と其友なる文學者、美しき藝妓と純潔なる處女、雜誌記者と其愛人なる女記者等を主要なる人物となし、具さに結婚期の惱みと歡びとを描く。作者獨得の藝術味と人生味と、卽ち此の篇に描き盡くされたる也。

生田長江氏　本間久雄氏共著

■最新社會問題十二講

第一講、解放運動としての佛蘭西革命。**第二講**、産業革命と勞働者階級の發生。**第三講**、資本主義的經濟組織の解剖。**第四講**、空想的社會主義と科學的社會主義。**第五講**、マルクスの唯物史觀と剩餘價値說。**第六講**、デモクラシイとは何ぞ。**第七講**、勞働組合主義と同盟罷工。**第八講**、ギルド社會主義とサンヂカリズム。**第九講**、選擧權擴張問題。**第十講**、婦人問題と性的道德。**第十一講**、婦人參政權問題。**第十二講**、婦人職業問題。

總洋布最上製
定價金貳圓
郵送料十二錢

中澤臨川氏　生田長江氏共著

■近代思想十六講

■近代思想の概觀■レオナルド・ダ・ヴィンチと文藝復興■近代主義の第一人者ルツソオ■ニイチエの超人の哲學■スチルナアの個人主義■トルストイの人道主義■ドストイエフスキイの愛の福音■イブセンと第三帝國■ダアヰンと進化論■ゾラの自然主義■フロオベルと懷疑思想■ジエムスの實用主義■オイケンの理想主義■ベルグソンの流動哲學■梵の行者タゴオル■ロマン・ロオランの眞勇主義——以上十六講——

總洋布最上製
定價貳圓
郵送料十二錢

388
208

終